

6538 15-4-1

戦 歿 学 生 特 集 号

40 号 記 念

緑 丘

全 国 版

(通巻)No. 40号  
(39年度 4号)

(編集責任者)

大阪市東区道修町三の一  
塩野義製菓株式会社内  
兼 目 英 三

(緑丘大阪支部)

大阪市北区梅田八番地  
新阪急ビル 8 階  
サッポロビール(株) 内

唯 飛  
從 潜  
自 有  
然 時

英 俊 五

唯 飛  
從 潜  
自 有  
然 時

苦 米 地 英 俊  
(小樽高商三代校長)

うまさもでっかい

話題の生ビール

サッポロジャイアンツ



暑さしのぎに一月ほど前、一番古い原稿など納めた箱を整理していたら、赤ちやけた紙の間から、やはり昭和十四年か十五年、満洲、新京での緑丘集のものである。終戦後大陸から引揚げてきた同窓仲間が殆んど無一物で帰ってきた。思い出の写真などお持ちの方は無いに違いない、と思いつくか復写して心当りの六人の方に送った。それと同時に、写真登場の主で御氏名おわかりの方は御教え願いたい、と書添えた。現在のところ、九人の方々しか、わからない(私を入れて十人)。残る九人の緑丘につながる仲間のこと。姿・形は、あああの時一緒に写真をとったと浮んでくるものの、大事な名前が出てこない。この写真を手にした七人の同窓は、その後の四半世紀の経過の重みに思いをはせつつも名前を思い出せぬことに一様に焦燥を感じている。

御覧になって思い当られる方々、特に写真中に登場しておいでの方々どうか「緑丘」編集部(墓目英三君までお知らせ下さいませんか。

# 読者の声

御心当りの方は？

中野清一 (大15)

その御連絡を待って複製ものながら、それぞれ贈呈申上げます。なお現在迄判明の方々は次の通りです。(前列右から)  
久々津氏(奥村義信先輩からの通報による。札幌御在住とか。緑丘会員名簿には記載済)  
奥村義信氏(三人目、大4卒)  
中野清一氏(四人目、大15卒)  
天野不二夫氏(五人目、昭2卒)

(中列右から)  
皆川莊一氏(昭21卒。昭37長逝)  
米沢四郎氏(昭8卒。昭17戦死)  
猪木金人氏(四人目。昭8卒)  
武井実氏(六人目。昭16卒。会員名簿には記載済)  
本間誠一氏(七人目。昭11卒)  
紀野重仁氏(八人目。昭9卒)  
(後列は四人の方々不分明)



## 「緑丘」を永久のものに

北条恒一

私はこの「緑丘」の存在を知って始めて卒業生のほんとうの血の通った広場にたどりついた感じである。ところが、この貴重なものが、殆ど墓目先輩一人の労苦により形成されていることを知ったとき、私は驚いてしまった。しかも二千何百部発送して、会費を払う人

が七百何十人しかないと聞いて、また驚いてしまった。緑丘人は、そんなに冷いものなのだろうか。  
私はここで、ひとつの提案をした。この「緑丘」を、ほんとうに愛し、これを失われた青春をよび戻す心の拠りどころとして緑丘人であるか。名前は何でもよい、財団法人緑丘編集部でも、何でもよいから設立して、墓目さんを中心として、安心して「緑丘」を発行できる体制をつくつたらどうだろうか。  
墓目さんにしたって、生身の人間だ。永久にこの仕事をやって戴くというわけにはいかないであろう。(墓目さんよ、おこらないで下さい)しかし「緑丘」は永久のものでなければならぬ。(昭一四)

## 緑丘人の心を貫く一本の糸

本間毅郎 (昭三二)

最近「緑丘」をみるのが楽しみです。最初の頃は正直なところ年寄りの懐古趣味かと思っていたのですが、送られてくる「緑丘」を重ねて読ませて戴いている中に、何かその中に緑丘人の心を強く一本の糸いゆる緑丘精神というのでしようか、そういうものがひしひしと身に感じられるようになり、大変失礼ながら今頃になって御努力の程、深く感謝している次第です。

# KYC

業 群 主 学 資 輝

最高の品質と  
最高の技術を誇る  
KYCの製品

### コンベヤー関係

- ベルトコンベヤー各種
- クライマーコンベヤー各種
- スラッターコンベヤー各種
- ローラーコンベヤー各種

### ミキサー関係

- コンクリートミキサー各種
- バッチャープラント各種

### KYC ポンプ各種

### 計量器関係

- セミバッチャー各種
- KYCスケール各種

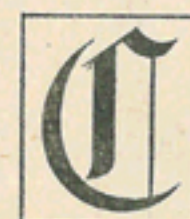
### KYCモータープリー各種

総合建設機械のメーカー

# KYC 光洋機械工業株式会社

代表取締役社長 奥村正美(昭17年)

本社	大阪市北区南同心町一丁目二番地	電話大阪(351)3091~5(代表)
大阪支店	大阪市北区末広町一丁目二番地	電話大阪(928)6531~5
東京支店	東京都千代田区神田鎌倉町六番地	電話東京(254)5601~5 (252)2012
九州営業所	福岡市中浜口町一九番地	電話福岡(3)1841・2421
名古屋出張所	名古屋市東区堅代官町一四番地	電話名古屋(94)1315
仙台出張所	仙台市北二番丁八三番地	電話仙台(22)5247・5592
札幌出張所	札幌市南十一条西八丁目五四一の二番地	電話札幌(25)9868・(26)7964
釧路出張所	釧路市大町一丁目四番地(大町ビル内)	電話釧路(2)1583
高松出張所	高松市塩上町一一八一番地	電話高松(3)4392・2771
広島出張所	広島市松川町四の一番地	電話広島(61)7620・9248・8804
富山出張所	富山市豊川町一七番地	電話富山(2)6505・2379
工場	寝屋川・守口・吹田・東京所沢	

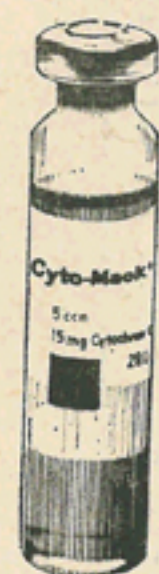


脳卒中になっても 諦めず 積極的に治療すべきです!

発作後、直ちに…救急薬を

馬心筋チトクロームC製剤

チトマック注射液



本剤は出血、軟化の何れの場合でも、直ちに投与できる救急薬で、従来の只安静第一主義の治療法を大きく進歩させました。本剤の投与が早ければ早い程、脳組織の細胞呼吸が改善され、意識回復の効果が高く現れます。...

脳卒中後遺症の治療 再発予防に

脳卒中 循環不全治療剤

アポブレタル カプセル

急性期の卒中症状がすぎた後遺症の治療には本剤の内服療法をお続け下さい。脳の血行を改善し、脳代謝を好転すると共に、血管を強化する3つの成分が脳組織の回復を促進して各種の障害の改善に効果を示します。...



日本新薬株式会社 本社 京都市南区西大路八条下ル 社長 森下 弘 大正14年卒 東京・大阪・福岡・札幌・名古屋・京都・富山・仙台・広島

緑丘人のバトンタッチで一命を救う

墓目 英三 (昭一)

卒業してすぐ薬業界へ就職した方では第一人者と自負している。しかし二十数年間の勤務中、緑丘人の御世話になった事は数え切れぬ程あるが、なかでも昨年薬業界に居られる先輩後輩の協力により、老父の命を救って下さった恩義は忘れる事が出来ない。

この事は私事ではあるが、沢山の人間に伝え、あえて危急存亡の時は必ず一命を救う事が出来るであらうと、こゝに敢えてペンをとった次第である。

昨年の春である。春とはいえ、北海道の三月はまだ雪の中で、暖かい関西から見れば思っても、ぞつと身振する時節であった。

真夜中、突然余市(北海道)から電話との事、父の容体がおかしい、半身が動かなくなつた。いま医者が来てるが、いわゆる脳卒中らしいという、あわただしい通話であり一寸戸惑つた。

自分は薬業界に居るので業界新聞には毎日目を通し、新しい輸入薬学術ニュースには関心を持っておりドイツのチトマックが日本に入つて来た事も小さな記事で知つておつた。しかし、この薬を発売しているとはいつておらぬ。このチトマックとは細胞呼吸賦活剤である。素人向

きに話すならば、破れた脳の細胞に酸素を送り、賦活させる機能を持つているのである。私はそう自分で解釈していた。

ようし、これを試してみようと思ふにきめて寝に就いたもの、様々の不安が私を呼び起こし、遂に一睡もせず、夜明けを待った。

会社へ行くなり、数週間前の業界紙を引取り出して輸入会社を探がした。日本新薬森下社長(大一一)の所である。同社の小田島和夫君(昭三)に電話して、飛行機で送る方法を交渉した。容体は一日もゆがせに出来ぬ、チトマックは一日でも一時間でも早ければ効を奏すとのこと。

小田島君のサービスでサツポロ営業所高橋正彦君(昭一六)に電話連絡して、札幌営業所から届けること、一方後輩のシオノギ札幌支店木村俊也君(昭一四)に連絡して受取の依頼を電話した。

勿論この薬は素人では注射は出来ない。ペニシリンシヨックの試験をするように少量の注射で、その反応を見よとの注意も受け、このバトンタッチが首尾よく行く事を祈つた。

受けとつた。注射した。との感謝の電話が故郷の母から届く。七十七才の父を元の身体にしたい、そうして語り合う事の出来る身体にしたいと念願した。

全く見事な緑丘人のバトンタッチで遂に父は再起した。七十七才のお祝も一年延長してつい最近喜寿の祝を兄弟揃って祝つたところである。神の恵みというか、生のあるもの

世に必要な人の命を永らえてくれるもの、見えざる手によって救つて下さる有難さは何にもたえようがない。唯々感謝あるのみである。

完全に治癒、父はお祝の佐渡おけさも唄って元気な所を見せてくれ、いまでは手紙も病以前の美麗な字で書くようになった。ハガキから、手紙、それも枚数が一枚より二枚と枚数も増えて来る、疲労が完全にとれたといつてもよいであろう。

父のお祝に出発の前日、広大の中野清一教授(大一一五)が父の事を心配して大阪駅から会社に電話を下さつた。今大阪駅に居るが、支那から送つて貰つた鹿茸精(不老長寿高貴薬で有名)があるからといつて分けて下さつた。この有難い御厚意を受けて、札幌に飛び立った。有難く受けた父は、その日の朝から心臓の調子のよい事を私に心をこめて感謝して下さつた。

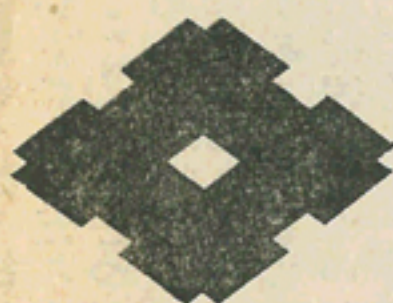
こうして緑丘人の力によって、父の命を救う事が出来て、いまや私は最大の幸福者であると感謝している。

老人に会う度に、このチトマックと鹿茸精を話すと、必ずノートに書く。しかし、大事な事は本人よりも家族が知つておらねばならぬ事である。

倒れたらチトマックを打つて下さい。(塩野義製薬KK資料室長)

緑丘綴込表紙

二〇〇円 申込は編集部へ



住友海上火災

本店 東京都中央区八重洲2丁目1 TEL(272)3251 大阪支店 大阪市東区北浜5丁目 新住友ビル TEL(203)2101

# 戦歿学生特集号に寄す

苦米地 英俊

科学の研究が深まり、人智が進むにつれ、因果の法則の不動性が強く認識されるに至った。因が縁によって結ばれて生成された果が目前に展開される万物の仮の姿であり、時の流れに洗われて森羅万象を画き出す。それが有情の天地であるか、はたまた世情の世界であるかは見る人の心々に因る。乃木將軍の和歌に

ほととぎす己がまにまに鳴く声を心々に人は聞くなり  
というのがある。二人の愛児を二〇三高地で戦死させ「月には物を隠さ、りけり」と吐て泣かれたことが、いまも心に残って居る。

世に偶然などある筈がない。必ず因果の法則に従って発生するのだとの説もあるが、人事の複雑な因果関係を科学的に分析して説明することは可能であろうが、既に成生された現実を変え得まい。智慧をしぼった注意と努力で支障を排除、または危機を脱することは出来ようが、運不運を自由自在にする途は開き得まい。

神ならぬ人間の理知を越え、予期しない事が起った偶然を考え、結果的に見て運が良かった悪かったと感ずるのは、蓋し自然であろう。だが世はいう運命論者が一切を運命に帰し、正しい人生の目標を達成のための不断的努力、周到な注意を疎かにして自己の責任を運命に転化するのには卑怯であろう。

しかし、己になんの責任無くして命ぜられるまゝに自己または近親の貴い生命財産を失うに至った戦争犠牲者に思をいたす時、宿命の無残さに慄然同情の涙を禁じ得ない。

晴の卒業を目前にして学園を後に師友に別れて、学徒出陣の途についた諸君のわるびれること無き勇姿に幾度暗涙を呑んだことであろう。別れに臨んで寄せ書きの国旗に壮行の辞として「飛潜有時唯従自然」の二句を認めた。人生の行路には揮身の勇を振るって飛躍活動すべき時もあり、忍び難きを忍んで、じつと潜伏すべき時もある。特に戦に臨んでは深刻な情勢に対処して急遽飛潜の判断を下すべきことが多いと思われたからで、若さに任せて暴虎馮河の勇に走らぬように祈ってやまなかつた心の現れであった。

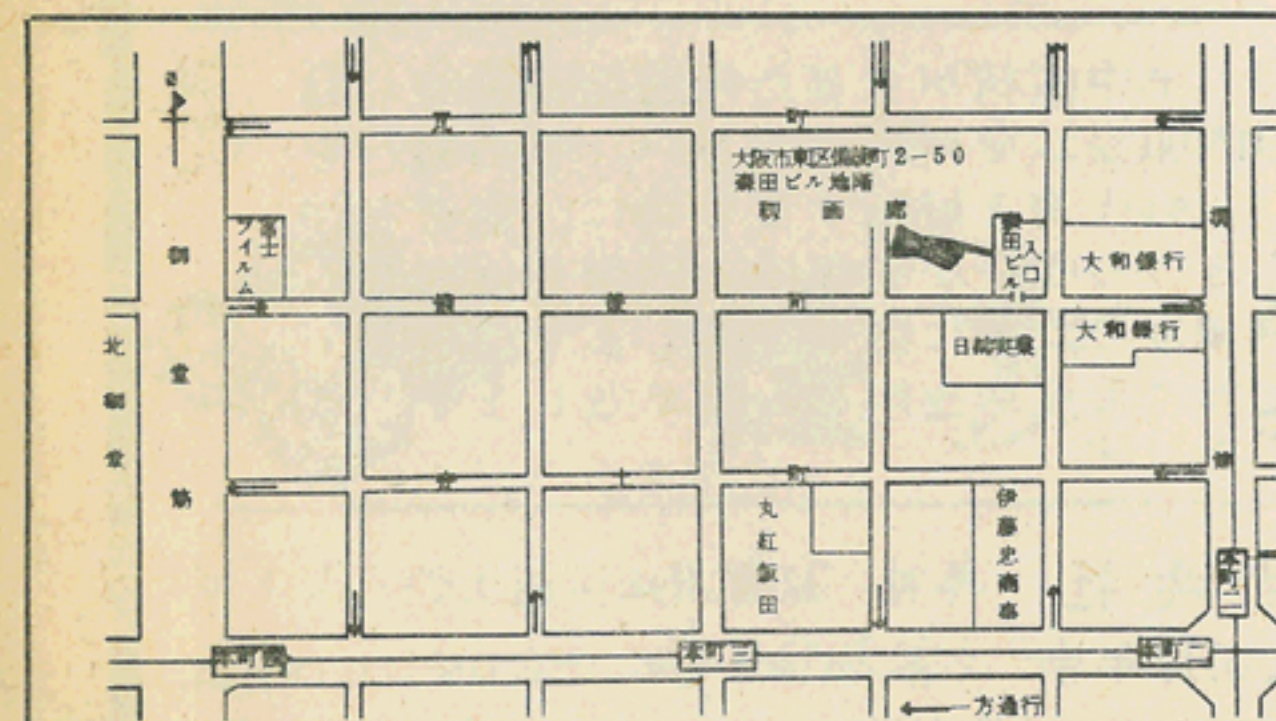
戦没され、また帰国された、それぞれの人について書き度い思い出が多いが、一部に偏することを恐れて思い止まることにしたが、この特集号が同窓の団結を一層強め、学園をさらに向上させる機縁となり、相寄り、相助けて平和繁栄の世界建設に貢献し得るならば、その意義は一段と深まることになる。終りに心から戦歿学生の冥福を祈り合掌してこの筆を擱く。

## 鞆画廊

古谷寿太郎

大阪市東区備後町2-50

森田ビル地階



# むかしの友に

# 三谷 晃

学校を出てから二十年経った。

あの高い丘の上の

大きなポプラの樹のある学校を

ときおり夢にみることもある。

たあいのない風景や出来事の繰り返しなのに  
夢はいつも

さびしいいろに染められていて

さめてから僕は

一層つらい思いをした。

丘をくだっていった

あの学生服の仲間たちには

もう二度と逢えない。

たまに街角で声をかけられても

そいつは立派な背広かなんか着て

むかしの仲間とは似ても似つかない。

ああ

石の下で眠っている

戦争で死んだ友よ。

きみだけがむかしのままだ。

そしていまにも

ピグーだのゴツトルだのと

喋りだしそうな顔をしている。

きみよ。

ぼくがさびしいように

生き残った仲間たちもきつとさびしい。

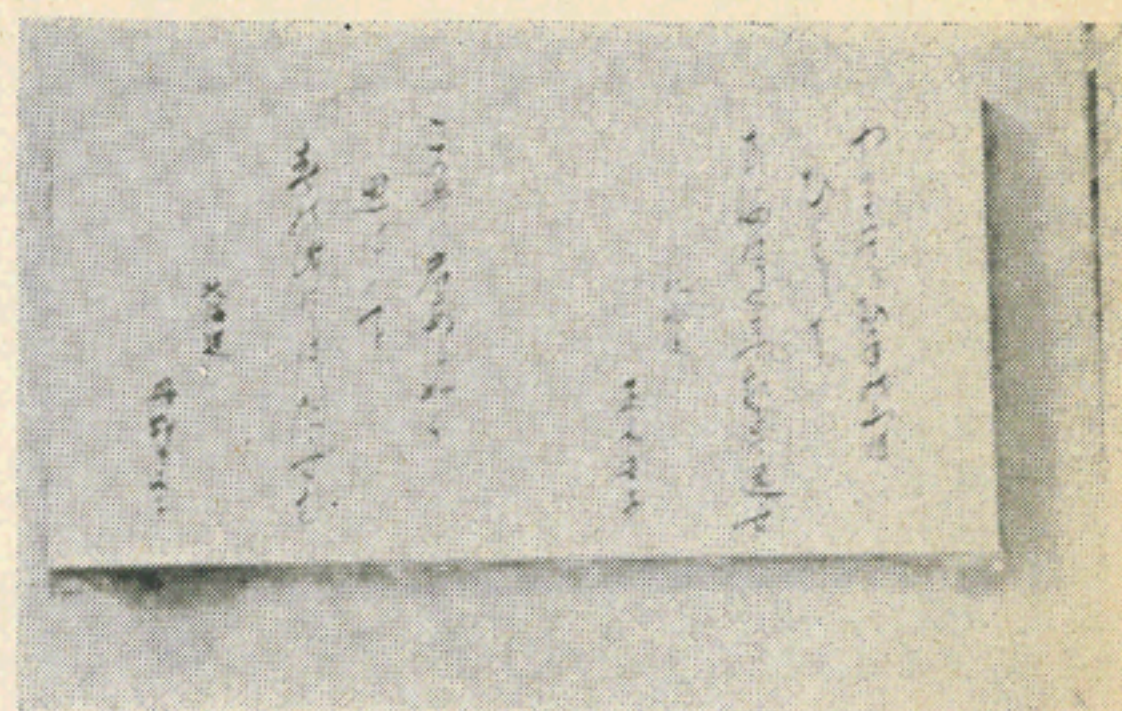
思いたったら

もういちどあのポプラの樹の下に集まって

しずかにむかしの歌をうたおう。

死んだものは還ってこないという

あのセンチメンタルな歌を。



### 写真説明

河西辰男氏 撮影

(右頁) 右上 信濃の塔(長野県)

右下 愛媛の塔(愛媛県)

左上 千秋の塔(秋田県)

左下 京都平安の碑(京都府)

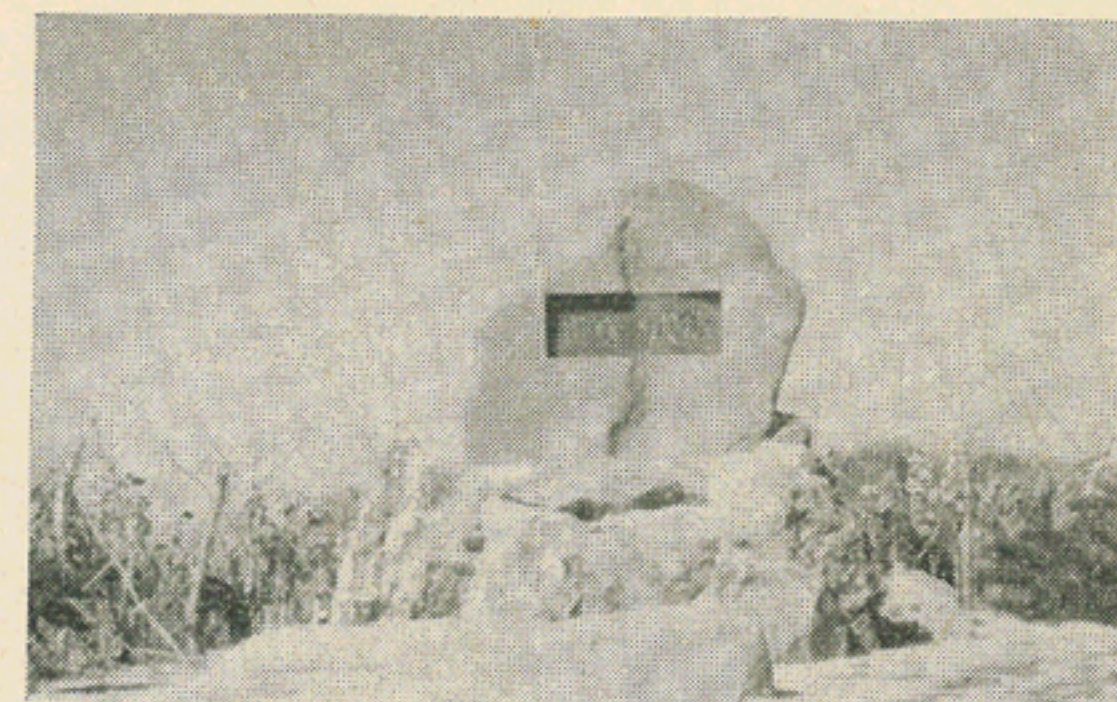
(左頁) 右上 北霊碑(歌碑)(北海道)

左 北霊碑(同上)

右下 紀乃国之塔(和歌山県)

左 慰霊塔(山梨県)

掲載写真希望者は「緑丘」編集部へ御申出下さい。



## 三度沖縄の戦跡をたずねて

河西辰男

(昭一四)

商用の寸暇をさいて、七月一日沖縄の南部戦跡を訪ねました。わづかこの三年間に戦跡が大きく変わりつゝあるのにびつくりしました。現在沖縄には本土関係の慰霊塔が一四か所ありますが、最近各府県が競って慰霊塔を建て、今年中に七か所建つ予定だそうです。昭和三十七年をはじめて戦跡を訪ねたとき、終戦時スコップがなくて、手でコンクリートを固め、その手の型が残っている「魂魄の塔」や、ぼつんと丸石を置いただけの「バクナ中將の碑」や、かよわい女子師範学校の乙女が自決した洞窟のある「姫百合の塔」の前に立ったとき、戦争に対する無限の悲しみを感じました。

廻がわづかこの三年の間に、草が茂り石ころだらけの山道がすっかり舗装され、無限の悲しみのこめられた紺碧の空、深緑の草原にぼつかりと超モダンな見張し台が建ち、荒削の木柱の墓標がピカソスタイルの慰霊碑に変わったのを見て、これだよ、だろうかという気持と、自然のまの景勝のなかに安らかに英霊をそとやすませて上げたいという感情が混然と湧いて参りました。特に最近建立されている「慰霊の碑」が、遺族のかたのお気持にそぐわない「虚礼の碑」となつてはと危惧した次第です。心から緑丘出身の戦死者の方々の冥福をお祈りしました。(松下電気業株式会社第一部長)

# 南暎に散った緑丘人を偲ぶ

大庭 定 男

(昭一七)



緑丘誌上で加茂学長が「今次大戦で散った同窓の霊を祭る所を置き、学園全体が朝な夕なに心からの礼拝を捧げ、若い学生諸君に、先輩からの血のつながりを胸中深く刻み込んで貰いたい」と発言されているのを知り、感動に心ゆさぶる思が致しました。

二十年前のあの戦争、そのなかに若き血を燃やした自分、南方でお会いし、また別れた先輩やクラスメイト、さらに再びまみえることの出来なくなつた人々、会うは別れの初めとはいえず、余りにも厳しく、大きな怒濤のなかに過ぎなければならなかつた運命の日々であつた。

緑丘誌が戦歿学生特集を出されることを知り、南暎の果てに散つた数人の緑丘人を偲ぶべく、ほこりと汗にまみれた当時の日誌と緑丘会員名簿をとり出してみた。

## 南方出征まで

大東亜戦争開戦の朝、小樽は大雪であつた。新雪をけつて、正気寮から登校、第二学期の試験の日であつた。マツキンソン教授はその日の正午頃、特高に連行され、丘を下つて行かれた。ワクワクするような興奮と大事になつたという重圧感とが支配するようになつた。

翌十七年四月十八日、三年になつたわれわれは小樽市役所で徴兵検査をうけ、間もなく「十月一日入営すべし」との令状をもらつた。学校当局は半年短縮分を何とかして授業させるべく、土曜日でも六時間、夏休みも殆んどない強行軍を続け、秋風が小樽の港にふく九月十六日、苦米地校長より「五大洲に雄飛せよ」の卒業の辞をいただいた丘を下つたが、われわれの行手は汗と革くさい兵営以外にはなかつた。

それから数年間、太平洋や大陸の各地で戦つたクラスメイト中、二十数名の戦死者を出した。さらに消息不明約二十名の中にもかなりの戦死者がありはしないかと心配になる。経理部幹部候補生で国分寺の経理学校に入った時、そこに多くの先輩や、クラスメイトを発見した時は嬉しかつた。これも半年足らずで、十八年十一月末には卒業、若い見習士官として勇躍南方に赴任した。

## バンドンにて

私が配属されたのはジャワ島バンドンにあつた独立混成第二十七旅団司令部であつた。その経理部に行つてみると先輩の浦島嘉雄氏(昭十五富士スーパード編機)が兵隊として勤務されているのには驚いた。

しばらくたつてから、新たに満州から転進して旅団の戦斗序列に入つた。追撃砲隊に浦島氏と共に視察に行つた時、一人の将校に浦島氏が話しかけた。「少尉殿、どこかで見た事がありますね」、この髭の濃い少尉は外ならぬ同じ昭十五年卒の曾根輝久氏であつた。二人は何年かぶりの奇遇を喜びあい、私は緑丘の裾野の広がりを感じた。

バンドンはジャワ島きつての風光明媚な高原都市であつた。こゝには同じ主計将校として坂野上佐吉氏(六十二、村上高枝々長)鎌田忠人氏(昭十五、三井物産油料課長)も居られ、時々会つて飲を共にし、緑丘を語り合つた。

十九年九月頃、隸下の大隊から絹見一郎氏(昭十五)が主計下士官候補者としての教育をうけるため、昭南(シンガポール)に分遣されることになつた。

牧野君とは正気寮の生活を共にした。富山県出身の威勢のよい青年でテニスがうまかつた。面白いことには風呂が嫌いで絶対に風呂には入らないといはれていたが、その後どうなつたであろうか。

護国隊の記録映画がテレビなどの戦争回顧録のなかに時々出てくる。内地の基地を飛び出し、比島のレイテ沖に出撃する直前、司令官と握手する牧野君は真剣そのもの、鋭い顔でうつつている。生死を超越し、悠久の大義に生きることを誓つた。その時の彼の心中は如何であつたろうか。

もう一人、比島で散つた同級生に田口哲君がいる。彼は卒業後、当時



田口 哲 君

の関東配電に勤務し、敗色のこくなつた十九年に応召、比島に転戦したが、米軍の物量の前に部隊は崩壊し、悲惨な山中敗走を続けるうちに終戦となつたが、その時には田口上等兵は栄養失調と腕の傷(ゲリラとの戦で負傷)のためかなり弱つていたらしい。終戦の報は、この山中にも遅れてどとき、山を降りて集結する途中の山中で三十三年の生涯をどちた。

とになつた。この事前教育のため、一ヶ月程、私の下で働いた。真面目に、コツコツと勉強されたが、その後極めて優秀な成績で帰島、ジャカルタの電信連隊附の主計下士官に赴任した。最後の晩、官舎によんで、すき焼をしながら四方山の話をしたのが、これが最後にならうとは戦地とはいへ、平和であつたジャワでは神ならぬ身の知る由もなかつた。

## 敗戦と二先輩の死

敗戦後のジャワはインドネシアの独立斗争、日本軍武装解除に來た英印軍との衝突にまきこまれ、さらに苛酷な労働、悪い栄養状態のため、多くの犠牲者(千人以上)が出た。前述の曾根、絹見両先輩もこの混乱のなかに不慮の死をとげられたのである。

絹見先輩の悲しい死について書いたのは、昭和二十一年も暮になつてから、タンジヨンブリオクの作業隊に於てであつた。敗戦後、ジャカルタの駐屯部隊は主力をボゴール附近の山中の廠営地に移駐することになつた。特に、インドネシアは独立運動に狂奔し、独立運動に協力しないものは凡て敵である、この前提で、中立的な立場を守つていた日本軍の武器を要求したり、あるいは襲つたりしていた。廠営地への移住は進駐する英印軍との接触をさけるのが主目的であつたが、何れは下山しなけ

神奈川県の厚木の奥の美しい山河のなかに育つた彼は「坊や」の愛称のもとに多くの人々より愛された。現在は母ひとりとなり、山の中腹の墓標には「故陸軍兵長田口哲之墓」と書かれ、静かに眠つている。昭和二十七年九月の七周年には仲のよかつた同級生八名で墓参りに行つた。

## 南暎の子らに

昭和二十二年五月十日、私達のつた復員船熊野丸(旧陸軍の航空母艦)は比島の沖を一路北上していった。当日の日誌には「ミンダナオ島の沖をすぎ、夕方船はレイテ島の沖をすぎた。日は漸く沈まんとし、夕焼は美しかった。

レイテ島は低い丘陵がつづき、ジャングルに覆はれている。こゝが皇軍血涙の地であると思へば悲痛な感がある。牧野が護国隊員として突込んだのもここである。幾多の戦友の御魂が散つたこの島である。いま、この島は真紅、紫、青色等の夕焼の下に静かに横たわつている。煙さへも出ていない。ただ幾千幾万の亡霊が合唱しているが如き錯覚に陥る。夕食後の納涼のために皆甲板に立つて涼んでいる。「まだあの山の中にいるという話だぜ」「へんな船が通ると思つているだろう」と話合つている者もあつた。皆声を低めて話し合つていた。皆亡き戦友のために涙を流しているのである。

比島では、この外に前述の田口君や中学校や経理学校の同期生が数多く戦死している。三年半を同じ南方地域に勤務した私には特に哀悼の意を禁じ得ない。

# 緑 丘

ればならない日が目の前に迫っている(労働に使用される)のに、インドネシアの襲撃を避けながら、危険な移住を行うのは無駄なことだと思はれていた。

絹見主計軍曹が設営資金をもつて上官および護衛分隊と出発したのはこのような物騒然たるなかであつた。丁度居合せた連隊副官の語るところによれば、出発直前、トラツクの荷物の上で絹見軍曹が何か一生懸命書いておる。「おい絹見、元気でやれよ」と声をかけても気づかない。そしてトラツクは出発したが、その後紙が落ちていた。その紙には無駄なれや、無駄の果なる、山ごもりという川柳がかゝれていたといふ。

このトラツクは廠営地への途中、インドネシアに攻撃され、全員行方不明となり、その後の調査でも全然手がかりがつかめなかつたという。大きな無駄と思はれた戦争、そしてその無駄の上塗りのような山ごもりが運命となつてしまつたのである。絹見先輩が出発直前に一心にかき残したもの、そこには既に大きな運命的なものを予感されていたのであるまいか。

部隊における評判は極めてよく、その死は部隊全員より惜しまれたという。時に昭和二〇年の秋である、(緑丘会会員名簿には十二月八日となつてゐる)



牧野 顕 吉 少 尉

曾根先輩の死も同じ頃である。十月十六日、バンドンに漸く進駐出來た英印軍は、ジャカルタ、スラバヤの作業要員確保のため大量の日本軍の武装解除を行い、次々とジャカル

夕に送り出した。曾根中尉の属する砲兵隊も武装解除され、ジャカルタに送られ、ついでスラバヤに送られて、埠頭の作業に従事中、流行したチブスの為病死されたとの報をきいた。

## 比島で散つた二人の同級生

昭和十九年の暮、レイテ島の戦斗が敗退に終り、マツカーサーの物量作戦がフリーツピン全域におよぼんとしていたころ、ジャワ新聞で私は特攻隊護国隊の散華を読み、そのなかに級友牧野顕吉少尉の名を見出し

思はず「ヤツタな」と叫んだ。その後、放送で、彼が出撃前にソーラン節を歌つた録音をきいた。そして戦争の苛烈さを更めて知る思がし

シヤのインテリや、英印軍の中の印度人将校などから日本が民族解放に果した役割を讃へられ、自分自身もこれを信じている。しかしながら、これに伴う犠牲は余りにも大きかった。肉親を失はれた家族にとつてはいつまでもぬぐい去ることの出来ない心の傷として残ることである。戦いが激しくなり、シヤワでも敵の上陸に備へて築城、切込訓練に懸命になつていた頃、私の友のM少尉は次の詩を作つた。

吾南原の子若き日の  
ほむら火熱く胸を焼き  
溢れてやまぬ青春の  
命のきはみ今こゝに  
血しぶきあへぬ嘆きかな

さわれ吾が胸今燃ゆる  
紅い深き憂こそ  
明日仇敵迎へては  
血汐は花と咲きそへて  
散りもあへなん名無草

あゝ南原の空高く  
吹くや若風よ故郷の  
吾が同胞に言つてよ  
果てなき広野に只一つ  
星と輝く吾が命

戦争中、いつも、私達はいつ、どこで、どんな形で吾が命が終るかを考へていた。そこには、現在のような家庭を持ち、妻子と共に平和な暮らしを送るなどということは全く考えられないことであつた。

その意味で、戦死した多くの友に対し、精神的なひげめを常に感じて生きて来た。また、この世は「余世」という思は死ぬまで続くことであらう。

インドネシヤは十月頃から雨期に入る。半年の乾季が終らんとする頃空気が湿気をおび、空も何となく雨模様になつてくる。雨期を迎へる喜びは春を迎へる喜びより遙に大きい。曾根、絹見両先輩の霊も再び訪れんとする雨期にホツとされていゝことであらう。比島に眠る牧野、田口両君もこの復興し、経済的には大國となつた日本を見て欲しい。これも皆諸君の犠牲あつたこればそである。静かに眠れ、南原の子らよ。  
(三井物産株式会社)

消ゆべきは跡なく消えて夜の海に  
巨大空母はひた燃えさかる

かくてこそ人も果てなむ爆雷に  
打たれて魚数多浮きおり

蒼く澄みて鳴の遊ぶこの波の  
底動(うすぐる)き死の光あり

くらき海くらき眼をもて見つめつつ  
ただひたすらに合掌するも

友のゆく詭経の声をききながら  
われのゆく日を指折り待つ

眼を閉じて母を偲べば幼な日の懐し  
面影消ゆる時なし

「きけわたつみのこえ」

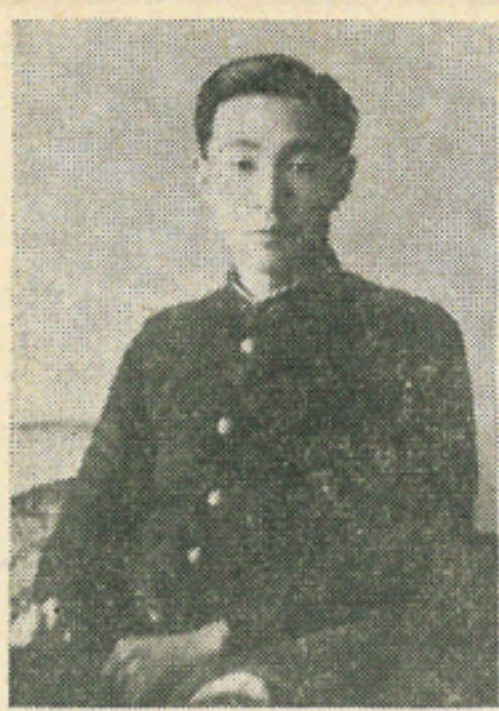
—日本戦歿学生の手記—より

# 小野隆也を偲ぶ

尾崎 哲平  
(昭一四)

毎年夏になると、戦争のことを想い出す。それは応召中の憶い出であり、また特に強烈な敗戦時の印象である。われわれ戦前派から戦中派の者にとつて、これは終生つき纏う宿命であらう。いま緑丘時代を回想し戦争で逝つた一人の快男児、小野隆也を偲んで見度い。聊か私事に亘り且つ古い話で恐縮だが、緑丘裏面の一駒という気持もあるので、お許し頂き度い。

「小野はどうしたんだ」「小野は君が一番よく知つて居る筈ではないか」その通りである。小野とは一所に北斗寮へ入つた。昭和十一年春である。



高商二年の小野隆也

経験は緑丘人のなかには相当あるのではないか(活動範囲の広汎さから推して)。小生の場合、理科方面を受験して居たのが、中学(前橋)卒業間際、教頭から、試験期日が遅いから小樽も受験してみろといわれ、義理で受けたら、最後それが通つてしまったという仕儀である。どうにも馴染めない科目があるし、快々として割切れない日を送つていた。

その時、小生を元気づけ、曲りなりにも落着かせてくれたのが、小野隆也である。寮では部屋が隣りで、同じ北関東の、宇都宮中学出身、スポーツ関係も大体同じで「ぼくは二年浪人して、最後にこの学校に入つたが、世のなかは考えても、どうにもならん。兎に角やるだけさ、学び克く遊べだよ」とサツパリしたものだ。

スは違つたが、何処へ行くにも一所で、良い人生勉強になつた。些か両者遊び過ぎる嫌いはあつたが、特に球撞きと麻雀には血道を上げて、後年どの位役立つか分らない。球撞きといへば、二年の終り頃、小樽版「人生劇場」ともいうべきことをやり、彼は、そのため一年棒に振り、一所に卒業出来なかつたのは残念だ。



(右)小野隆也 昭和一四年四月上野駅で  
(左)尾崎哲平

学校と街が半々という生活が続いたが、二年の夏には支那事変が勃発、小生の頭はスツカリ大陸に向いてしまひ、十四年卒業と同時に満拓に入った。

小樽を去る時、自分のノートや机、スキーまで一切(といつても決して多い方ではなかつたが)を小野に渡し、重荷を下ろした気持で、身体一つで満洲に渡つたが、彼は最後上野駅迄送つてくれた。その後も時々便りを書く、学校に断髪令が下つた時は非常に淋しがり、十五年卒業出来たといつては、もう軍隊に入つていた小生に迄喜んで知らせて来た。

やがて戦争は拡大の一途を辿り、小生もあちこち転戦移動し、仲秋の名月も毎年違つた土地で眺めるようになり、小野との交通も何時しか途絶え、運命の二十年八月を迎へたのである。

小生は八月二十九日、満洲でソ聯軍に捕えられ、遠く欧露マルシヤンスクに送られ、二ヶ年余り収容所生活を余儀なくされたが、この間十余名の緑丘出身者が、唯先輩、後輩というだけで、扶け励まし合ひながら帰還出来る日迄全員頑張り通したことを附言させて頂く。異國の収容所で学校の会が持てたのは、吾が緑丘と、他に一校あつたのみで、いまだに誇りに思つて居る。

さて帰還後間もなく、宇都宮に小野を尋ねたが、彼は既に亡かつた。ニューギニヤで戦死したとのこと。頼りにして帰つて来たのに、小生言葉も出なかつた。「いゝ奴は皆死んでしまつたのか」

いまでも淋しい気持に変わらないがわれわれの年代は戦争による犠牲多く、それだけに減つた人々は貴重であり、旧時代と、これからの時代を結ぶ中間的な存在として、歴史の責任を果さねばならぬと思う。太平洋戦争を共に闘つた男として、それが彼等の靈に報ゆる途である。

(昭一四 全国食糧信用協会)

ブランデータッチの新らしいお酒!

新発売!

若い仲間のあいだで話題を独占しています。これからの季節は つめたくしてどうぞ。

丸びん	350円
ポケットびん	120円

brandor

ブランドール

合同酒精

# 北方戦記

越崎 清二 (昭一一)



將軍廟飛行場

終戦以来満十九年、「緑丘」四十号の戦没学生特集号に編集者より執筆を乞はれるまゝに自分の従軍生活を顧み、同期戦没者の佛などをしのんで見たいと思う。私の入隊は昭和十三年十二月、当時原隊の旭川から満州国チチハルへ派遣中の歩兵第二十六聯隊第十中隊であった。厳寒のチチハル南大営の赤レンガ兵舎に防寒帽を被り一ツ星の肩章に毛布のタスキ掛けのいでたちで原隊から輸送されて到着したのは暮の二十日過ぎであったと記憶する。

派遣第七師団長は、園部和一郎中将、聯隊長はノモンハンで勇名を轟かした須見新一郎大佐であった。アルミ食器での元日の雑煮を祝い、酷寒の曠野に於ての初年兵教育、一期検閲を了えた途端ノモンハン事件が勃発、わが聯隊に応急派兵が下令された。渡満後半歳一ツ星から二ツ星に昇進された瞬間、同年兵の数多く否ほとんがハルハ河を渡ってホロンパイルの大草原に一期訓練の精華を文字通り着実勇壮に發揮して散華の山と化した。

幹部候補生として教育中のため残留となった、われわれのもとへ出動部隊の遺骨が列車に詰められて続々

と無言の帰還を遂げた。完全な負け軍さだったのだ。停戦直後須見部隊長は責を負って軍籍を退かれたが、ノモンハンで負傷の同期墓目の中尉と東京駅頭での劇的再会の当時の新聞報道は未だに記憶の新たな諸兄が多いことと思う。(写真)



東京駅頭で出迎を受けた須見大佐(右)は負傷した墓目中尉をねぎらう (読売新聞提供)

とを想ひ合はせ感慨無量なものがあつた。前大野学長の教官であつた事変当時の第三大隊長菊地少佐が生前「諸君のまえに小樽高商の大野教授というすぐれた先輩がいた」旨の訓話をされたことなども記憶に残っていることの一つである。

停戦の翌年、昭和十五年の夏頃であつたように思う、私が当時関東軍東軍軍庫衛兵司令として折々南大営からチチハル郊外の衛兵所へ通う途中、輜重隊の同期桜雄中尉(当時中尉)と邂逅したのは、一度彼の官舎をたづねて軍隊行李の中から取り出したノモンハンで負傷当時の鉄帽を見せて貰ったことがあつた。タマが鉄帽の外から入って内側をグルリと一回りしたのだが、幸ひ擦過程度で頭は事無きを得たと話す顔付をまじまじと見つめたことだつた。学窓三ヶ年間に山にスキーに歩き廻つた中学以来の同君が頭悩も精神力もすぐれ影のうすい処など微塵もなかつただけに比島周辺で戦死せる旨は信じ難い痛恨である。

昭和十五年十月師団はチチハルから三年振りに旭川へ帰還を遂げた。一ヶ月前の九月十五日父の訃報を受け取つていた私は輸送船か



桜雄中尉

ら小樽へ上陸早々中隊長と共に父の霊前に帰還の報告を遂げた。旭川在隊一年余にして大東亜戦勃発、翌昭和十七年五月アリユーシヤン作戦の独立三〇一大隊に編入されてアツツ政略に向つた。昭和十年卒の川島中尉とは当初からキスカ撤退終始行動を共にした。この作戦は〇号作戦と称せられて旭川出發時は勿論、厚岸乗船後も海軍との集結地大湊泊間も目的地は全く伏せられていた。出撃寸前「アリユーシヤン・アツツ島戦略」が明示された。無血上陸後のアツツ島守備三ヶ月にして、海軍部隊攻略のキスカ島救援、補強の企図のもとにアツツ島をもぬけの殻として全員がキスカ島に移駐したのは九月十八日であつた。その後山崎部隊のアツツ島上陸は無線によってキスカに報ぜられ、米軍上陸後の戦闘の推移も刻々手にとるようにキヤツチせられていたが、同期生橋場友吉中尉もその中にあらうことなどは露知る由もなかつた。三ヶ月守備の間、われわれの掘つた五〇センチ程度の岩磐の壕に抱つて戦い最後の無電の跡絶えた後の当時の暗然たる心情は到底表わす言葉を知らない。キスカ奇蹟の撤退後、昭和十九年一月召集解除のおり、留

萌の橋場君霊前に頼いてからもう既に二昔を経過した。

## 故 橋場友吉君のこと

川 島 道 雄

(昭一〇)



橋場友吉中尉

昭和十三年の秋から終戦まで兵隊ですごしましたが、ほとんど内地勤務で、戦地の経験が少かつたので、同窓の死に直接逢つたことはありません。会員名簿によりますと同期生で戦死された方々は十一名となつておりますが、どの戦場に眠つておられるのか、洵に申訳のないことですが承知しておりません。

橋場君は私の一年後輩であり、私の勤務先であります野口商店の關係で名前だけは知つておりました。その後旭川時代に隣りの隊におり、時折り練兵場で顔を合はせてはおりましたもの、特別な交際はありませんでした。その橋場君のことを書く気になりましたのは、最近アツツ島の慰霊団が現地に行つて来て、その報告を新聞やテレビで拝見し、また、その方々とHBCのスタジオで交信しましたので、同君のことを生々しく想起した次第であります。

私がアツツ島に上陸したのは昭和十七年六月八日で、其処に四ヶ月駐屯後全員キスカ島に移駐したのです。その後山崎部隊が、また上陸したのです。

同君の死を知つたのは私共がキスカ島を徹収し、北千島に帰つてからのことでした。二、三回顔を合せただけで話し合ったことも一緒に盃を

交したこともなかつた彼でしたが、その戦死を知つた時の私の驚きと、悲しみは大変なものでした。前記の通り戦場の關係で親近感を抱いていたばかりではありませぬ。それは彼の人柄にあつたものと思ひます。日焼した退ましい堂々たる体軀の彼とその温顔にあつたと私は思つております。

戦後戦場に復帰しましてから、彼が如何に周囲の皆に愛され、慕はれかつその将来を囑望されていた好青年であつたかを一族の各方面の方々から知らされ、しみじみと同君の死を惜んだものであります。

慰霊団の報告にもありましたようにアツツ島は非常に美しい島であります。この島にしかないという珍種の高山植物を含め、夏になりますと全島にお花畑となるといっても過言ではありまん。空は澄んで青く、水もまた綺麗です。

キスカ島を徹収し、アツツ島の沖合を通過します時、胸のなかで歌いました。

眠れアツツ島に玉碎勇士  
二度と此の地に來る時は  
嗚呼骨を拾つて仇を討つ。

同窓でアツツ島に眠つて居るのは橋場君ひとりではないでしょうか。慎んで、その冥福を祈る次第であります。



仙印国境の  
商学討究

北住 卓二  
(昭一四)

戦争の完全放棄  
と平和の確立へ

谷(旧姓柏原) 英 純  
(昭一四)

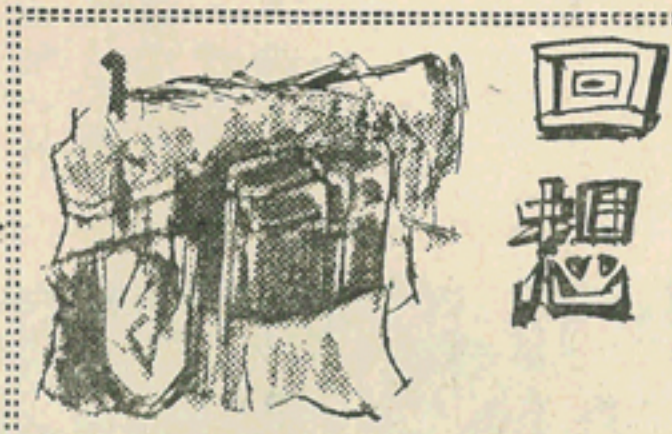
われわれが昭和十四年に緑丘を去って丁度二十五年を迎える。過日緑丘紙上で定山溪での有志会合の写真を見返して、一人一人の既に白髪が多い面影をみよながら二十五歳の歳月を一挙に引戻して、そこに懐かしい面影を呼び起し、しみじみと想ったことである。「生きていてよかったですな」

私は丘を去ってから今日まで未だ小樽を訪れる機会に恵まれない。戦後北村君を始め、大阪在住の同窓諸兄には、何年振りかの邂逅を喜んで、その後岐阜(神岡)から広島(竹原)へと転じて接触に薄いので、戦後同窓を語る資格はないかも知れない。最近第二回戦友追悼式が行はれ、何か戦時中への回想を強めたがこゝに謹んで祖国に殉じた同窓諸氏の冥福を祈り、一言申し上げ度い諸氏の亡きあと、戦争に対する批判は厳しいが、祖国に身をなげうった諸氏の誇りは、世の中が如何に変わるうとも高く掲げられるであろう。

私は恐らく同窓の誰よりも早く軍隊に入ったと思う。十四年の十二月に召集され、十五年一月には早くも「南寧」に向った。私は支那戦線にあって、もしや緑丘の先輩、同窓、あるいは後輩に会うかも知れないとひそかに願っていたが、私の属した五師団(広島)は当時南支にあつて北海道、東北の師団と行動をとることにした。当時五師団は

部仙印進駐作戦に従った。丁度八月の酷暑、約二百キロの道を重機の分解搬送に終始したことも、いまでは懐かしい思い出とさえなっている。こゝに一つの回想がある。仙印国境の「水口関」という小邑に達して仙印軍の兵舎と警備兵を近くに望む地点に立った。一夜、荒廃した支那人の大廈に宿泊した、仲々の富豪らしく建物は宏壮を極めていたが、もろろん空屋であった。とある一室に入つたとき、われわれが

驚いたことに、そこは書籍の山であった。書籍は運びきれなかったのか、一部散乱していたが、大部は本棚に正しくならべられてあつた。われわれが、さらに驚いたことは、それがごとごとく日本の本であり、それもほとんどが左翼文庫であつた。私はしばしば設備を忘れて、この本に眺め入つた。



回想

二、三冊めくってみると知つている神田古書街の店名ラベルが散見される。このとき私は久しく忘れていた小樽の光景を思い出したのである。そのときであつた。偶然というか、一冊の本が私の目を射つた。「商学討究—戦争の経済」であつた。この本は私も在学中に読んだ覚えがあり、確か第一寮の私の本棚にあつたはずだ。私は思はず抜き出

私の戦歴は昭和十五年二月、現役で戦車第九連隊(満州牡丹江省東寧)へ郷里の富山から直接入隊した。全国からの集合で主として九州、北関東、中部、北陸の人員で構成されてた。現役二年、召集一年の昭和十八年三月除隊まで、関東軍の精鋭部隊と称されながら華々しい戦果もなければ、戦友の悲報も知らずに、訓練に明け暮れていたのが実情であつた。

同部隊には同窓の人も皆無であり入隊当初機械などには、ほど遠い経験しかない私には訓練の主力である戦車操縦工術、無線通信、火砲、重機関銃、小銃銃の操作などに、イササカへたり気味の頃、特技(?)の経理部幹部候補生募集があつたのに勇躍応募した所、教官に「前線に出るのがいやなのか、命が惜しいのか卑怯者め」と抜刀して反省を求められては相談相手も居らず、志願を取り下げてしまった。昭和十六年六月、関東軍特別大演習の編成あり、完全武装のまゝ、宮庭に全戦車を集結、命下附連あり、私(軍曹)の車長を勤めるのは、九七式軽戦車で偵察、斥候、連絡用のもので部隊の主力である九七式中戦車ではなかつた。その頃北滿の地には

「南寧」を攻略したが、北方掃蕩戦に大打撃を受け、旅団長が戦死するという状況であつた。師団長は有名な今村中将であつたが、五師団は最強師団として支那戦線では有名であつた。この師団も南寧戦では散々であつた。「南寧」は余り知られない地名であるが、当時は、いわゆる援蔣ルート(要路)であり、現在も広西自治区の首都で、北ベトナムへの補給基地であると聞いている。われわれは即刻南寧北方の警備についたが、水のない陣地生活では、初年兵として最大限の辛酸を味つた。しかし丘陵のなだらかな平原に点々と望みされる緑色の部落、悠々と群れ動く水牛の一群—南支の風光は誠にどのかなものがあつた。その後太平洋戦争への道を早めたといはれる北

して手にとつてみた。古本のなつかしい臭いが一杯にせまってきた。本がどんどん持去られる。何にするかとみていると、飯盒水さん用の燃料である。また露営のまくら代りにしている下士官もいる。私はそつと「商学討究」を手のとどかない高い処におし込んで、薪代用の本を運び続けた。太平洋戦争に入って戦争の様相は一変した。支那戦線にあつた詩情とのかさは、もう何処にも見られなかつた。同窓の戦友諸氏も多くはこの頃消えて行つたのであろう。(三井金属竹原製煉所勤務)

幾百となく幕舎が張られ、召集の老兵士の諦観に似た顔が、祖国の期待を背に負って任務に励んでいるのが私には胸痛く映つた。日米開戦を知らされる頃には、もう既に幕舎部隊はいづれに転戦したのか、その影はなかつた。昭和十七年三月、関東軍機械化師団教導連隊に配属された(公主嶺)三月月間の穴居生活(四平街)のとき、この連隊に新しい召集兵が来た。いづれも四十歳を超えた人達であつた(現在私は四十七歳に達している感無量)前職は商人、大工、左官、農業など職業のもつ特性を全身に浸みつけている人達で、動作は職業に徹しても、型に嵌つた軍人の動作など出来ない。まして機械の権化のような戦車など操作出来るもの

同窓の戦友諸士の英霊よ! 諸士の純粋なる民族的、国家的犠牲を必ず昇華させて福祉国家の建設に微力を尽すことを誓ふ。 × × × 私の余りにも脆弱な倭小な人道主義が災してか、軍隊に居た期間、人を殴つたことは一度もなかつた。私は兄をソ連で、弟をニューギニアで失つた。戦争のよき面も悪き面も十分に体得している積りである。今日なお戦争のレポート、映画などには意識的に目を覆うている。 × × × 全く私的な記録となつて特集号の主旨から逸脱していると思はれるが、かく考えかき生きている人もあることに意義を求め、同期の諸兄の御寛容を願う次第である。(不二越鋼材)

「丘と海と白い雲」  
を聞いて

藤城 敏雄  
(昭一三)

本間 広松  
(昭一八)

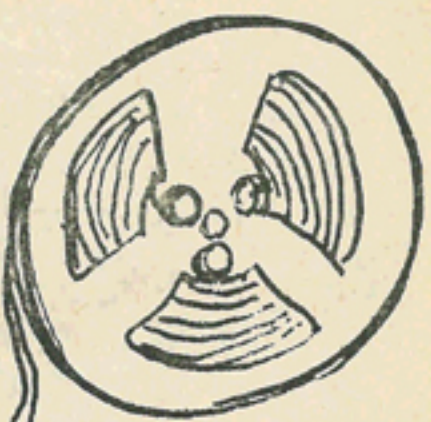
編集部御折で戦場に出陣した戦友学生のものがあり「丘と海と白い雲」と題する母校松尾教授解説のテープを拝聴いたしました。全く感動いたしました。死に臨んで祖国の父母、弟妹に送つた言葉の数々—自分を犠牲にして祖国の将来および家庭の幸福を唯々願う—全く胸を打つものがあります。いまは無き息子の思い出を涙ながらに語る母親を思う時、無事復員出来、平和な日々を送る自分がつくづく幸福である事

が痛感されます。心から戦友された緑丘出身の方々の御冥福をお祈りいたします。(大成建設大阪支店次長)

私は「丘と海と白い雲」のテープを今回中国、四国大会に出席してはじめて聞く事が出来ました。聞いて聞いている中に若き日の母校の校庭が浮んで参ります。小樽の港……… 伴を失つた父の声など聞いている中に胸がつまってほんとうに涙がとめどもなく流れてどうしようもありませんでした。若い方々にはこの何んとも云いようのない、しかも戦地に征つたこと

時代的要請とは言え身を命を賭して民族国家の将来の為に一生を終えた尊き覚悟に身のひきしまる思いであつた。如何なる時代であろうと民族国家の興隆なくして個人の生活向上はあり得ないであろう。我々戦後既に十九年余を平和に暮して居る者、先輩諸兄の尊い犠牲を無にせぬように散つた愛国の志の分も償えるだけの努力を払はねばならぬ事を痛感した。

原稿は一行十六字に願います  
編集部



# 丘と海と白い雲

宮地 邦介

(大一一)

なりの悟道に徹し莞爾として微笑み給う姿を拝したくとも思ふや切なるものがある。

「丘と海と白い雲」

このテープは去る三十五年八月十九日北海道放送局より放送された録音テープである。松尾正路教授のご好意により緑丘会から再録音されて「緑丘」戦歿学生特集号のために寄贈されたもの、オリヂナルテープは昭八會が母校に寄贈されたものである。



にぎり、永遠にやみのなかへ消えて行った。

白い雲の小樽港をみつめて松尾さんは憶い出を語る。

伴を失った父が学生時代の札幌からの通学した息子と小樽を語る。

小樽駅頭の万才万才の見送り

そして応召した学生も志願した学生もだれも何処で自分は死ぬのだとも考えなかったであらう。

大学では二百五十名の貴い生命を失った。

戦争で無事帰った緑丘人が語る。

死に直面して、死を待つ思い出とのどの渴き、戦場で死んだ優秀な当時の青年将校の憶い出。何れも家を愛し、兄弟を愛し、妻を愛して戦死して行った思い出。

台湾沖海戦からフィリッピン沖大戦へ最後の戦場からの送金と共に家を思い小樽の雪を思う便りを読む母

ニュース映画にラジオに母校校歌を歌って出陣を待つ、陸軍神風特攻隊牧野顕吉君(昭一七)——一九年十二月十日戦死の憶い出。

この番組は小樽商大教授松尾正路さんの綴る憶い出と共に学徒出陣で戦場に死んだ若き人々のみたまに捧げるものであると前置きして……

戦斗機の録音

西島俊雄(昭一八)フィリッピン二〇年一月八日戦死

サイシユウ島沖で多数の戦死者を出した四月十七日……

この若き学生たちは未来と希望を失い、この地上の幸福も知らず泥をのみ、血をはき、鉄と戦い、愛するものを抱くように魚雷をだき、銃剣を

最後に松尾さんは「この地球の上に戦禍のたえる事がないのか、戦争を口にする事は人類の最大のスキヤンダル、最大の屈辱だ。

平和とは、この白い雲のように、この静けさの秩序ではないか。」

この平和を守り抜き度いと覚悟をあらたにする松尾先生の声で終る。

小樽港と船舶の音

にした人、彼の若々しいニキビ顔が髻髻として思い出される。私の身内にも、あるいは大別山の露と消え、あるいはシベリヤの曠野に果て、あるいは、またガダルカナルの孤島に散華して行った。

ある人々はいふ「これ等戦歿勇士に対しては、われ等は徒らに悲しむことをやめて尊敬の念をもってせねばならない。この心掛けこそ、大和民族興隆の礎ではないか」と、その言や壮にして、また一部の真理なるべし。

しかしながら静かに思いを致す時我が父、我が夫、我が子を失った遺族の方々の真情は生命の尊さを知る仏弟子の常として哀憐一入のものがあることは何人からも許容されることだろう。問題は、この犠牲の悲しみを、将来ともに如何に意義あらしめるかということではないだろうか。

この録音テープの願うところも、またそこにあり「丘と海と白い雲」の平和な境地を築きあげることこそ吾等後人の責務ではないかと訴えられたものと思う。いづれにしても若くして散って行った英霊達が万人ひとしく希う、永遠の平和郷に死即生

# 緑 丘

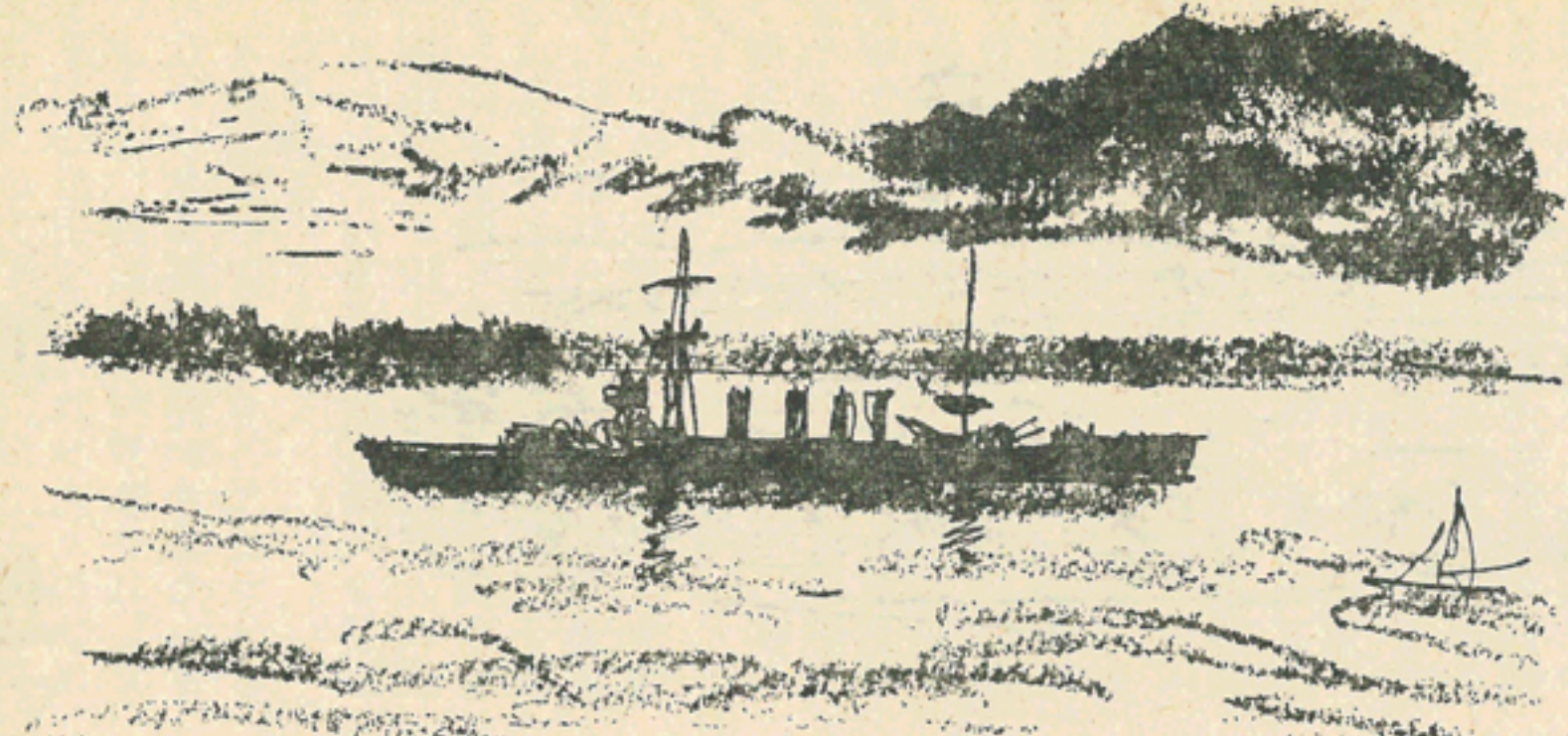
雄図を抱いて緑丘に学び、半ばにして召しに成じ、むなく大空に散って行った学徒諸君の思出の数々が松尾正路先生の真情溢る、流麗の御解説により壮重なる楽の音につれ、時に聞ゆる校歌の合唱に乗り切々として哀感をそより、誰れか涙なくして聞くことが出来ただろう。

或いは邦家の危急を救うべき身を一翼に托して今正に大空に飛び立たんとするとき声高らかに校歌を歌って行った牧野君を語る、同じ緑丘戦友の声、あるいは我が子を戦場に亡くした父君が愛児の縁につながら小樽の地を慕はれる情、あるいは、また遠く異境に母国を偲び、父母を慰め、弟妹を励ます熱血ほどばしる愛児の遺書を読み続けられる母君達の声涙等々……同時に思い出すは私と同クラスの橋本、湖島、上村(旧姓大島)三君の事共、共に老兵として、お召しに成じ、妻子を心に残して散って行ったことだろう。われ永らえて遺族の方々を思う時、胸迫まる。在学当時橋本君は稀に見る気鋭の士、陸上競技にスキーに活躍し、いまなお彼の勇姿が臉に浮ぶ、上村、湖島両君は温和な勉強家だった。わけて湖島君は四寮で私と朝夕を共

# 糸★を★繰★る★如★く

山本 美智雄

(昭一一)



星座がすばらしい輝きを見せて、東方の空から中天にのびあがって行く動きのなかに、宇宙人生の驚異や神秘を感じるのであるが、それにつけても、物思ふ心にも似た、いまの私にとって静かに思い返されて来るものは、かつて励まし合ひ、慰め合ひ、勇気づけ合つた、そして、すでに幽明境を異にした、あるいはいまも、どこかで同じ夜空をあかず眺めているかも知れない、あの頼もしくも敬愛すべき戦友のことなどである

更めて繰って見るまでもなく、戦争が終つて二十九年という歳月は流れ去つた。格別目立った華々しいこともなく、至極地道一途に送つたに過ぎない私でも軍隊生活を通して周囲の人々の深い愛情に恵まれていたことを思い起さずにはおられない。

第二國民兵として海軍に召集され二等主計兵で横須賀航海学校に配乗されていた私は、昭和十九年二月、予備学生を命ぜられ、武山海兵団に入団した。徴兵適令は引下げられ、学徒も学業半ばに出陣した頃のことである。イタリアは無条件降服をして枢軸の一角は、すでにくずれていた。タラワ、マキン、クエゼリン、さらにはサイパンの守備隊が玉砕した悲壯戦況の詳細については、知る

由もなかつたが、武山学生隊々歌の一節

「南の海に散り行きし  
人の心を心とし……」

それがそのまゝ私達の真情であった。小樽の先輩佐孝英太郎氏は同じ分隊の学生、同期卒業の斎藤信四郎君は別な分隊の区隊長であった。

昭和十九年の暮、襟に桜を一つつけ即日第九警備隊(在馬来半島ベナン)付に補せられた。第一〇一護衛艦隊の一艦に乗艦、呉―東支那海―台湾―香港―海南島―仏印―シンガポールは敵潜水艦、航空機の襲撃で緊張のゆるむ一時となつた。旗艦巡洋艦香椎、駆逐艦時雨はじめ歴戦の海防艦、油槽船多数は撃沈大破され、渡辺少尉(神宮皇学館出身)ほか数名の学徒出身士官も生死不明となつた。同期の桜の最初の犠牲者である。戦後手を尽して調査したが、杳として真相は判明しない。心許し慣れ親しんだ彼等の面影が胸に甦って来るたびに、未だに心痛むものがある。

ベナンはシンガポールの北約三八〇哩、風光明媚な島でベナンヒル、蛇寺等でも著名であった。米英に対し宣戦布告をした年の十二月、シンゴラに上陸して、シンガポールに破竹の進撃をした我軍の支隊が逸早く占領した印度洋作戦の重要基地であった。警備隊では、小野、加藤、甲斐、半田、柴田の各中尉が学徒出身で、掃海、警備、陣地構築、戦闘訓練に明け暮れていた私達にとって隊のガンルームはわづかに晏如の心をもち得る場であつた。荒浪に疲れ果

てた大小の船を抱く港のやすらかさが、そのまゝ彼等の心を端的に表現していたのである。しかし学徒兵たる彼等は、飽く迄も真摯で、飽く迄も敢闘し、断然頭角を現していたことも云はなくては淋しい気がする。

ビルマは敵の総反攻をうけ、ベナン沖でも重巡羽黒が撃沈され、切歯扼腕したが、学徒兵新兵曹が詠んだ。

火を吹きて傾く御艦人も我も  
怒りあまりてあふるゝ涙  
荒波を乗り切る艦の今はなし  
沖をなつかしみ磯に佇む

ほか数首と、もに当時の状況が眼前に髻髻とする。

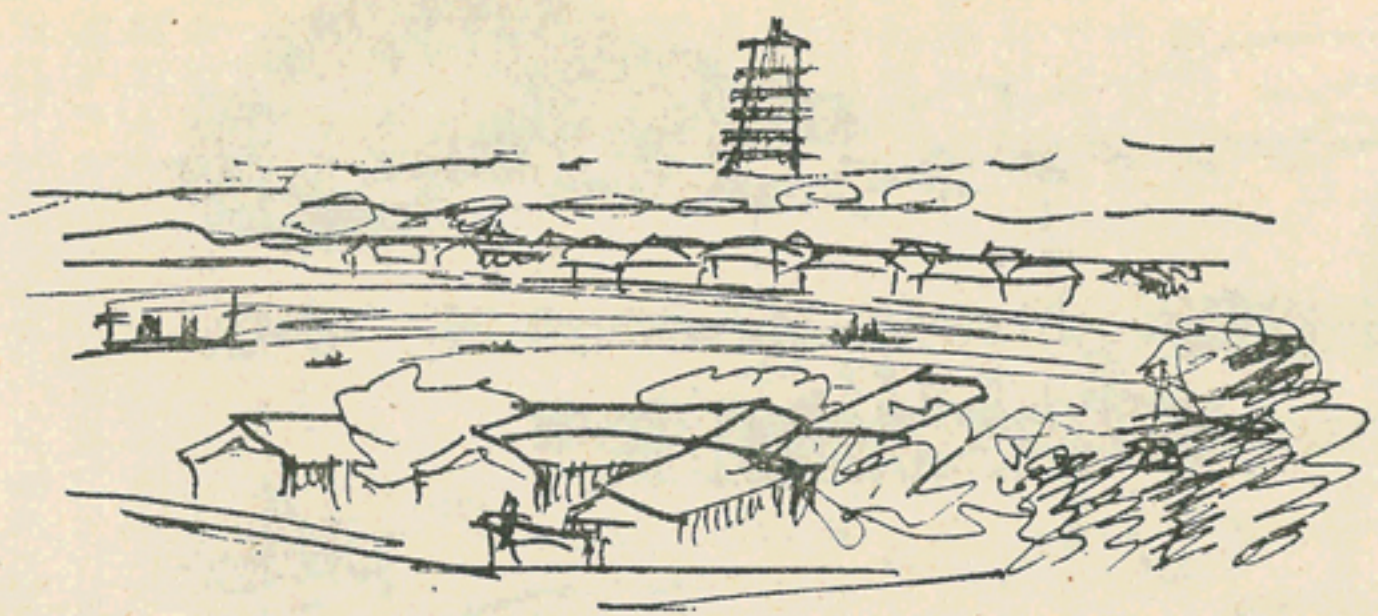
やがて終戦。慟哭と焦燥の幾夜かは明け、虚脱感と絶望感のまゝ、パタオース、スングバタニ、セミリオン、パトパハへの転々たる移動、矢折れ、弾尽きた敗戦国軍隊の連るべき道で覚悟のうえであったが、忍従生活のシヨホールバルなど各地の作業隊行、クルアンからの内遷、そして復員。

私達は、言語に絶する戦争の惨害を身にしみて体験したが、戦後の疲労と困憊、敗戦の荒廢は次第に遠のき、内容的にも形式的にも復興と建設が進められ、私達の国には若い世代と新しい生活が育つた。

追憶の糸を繰って眺めた過去は、辛かつたことも、苦しかったこともそして悲しかったことも、いつしか忘却され、誰にとつても、おしなべて華かなものになるものなかも知れないが、尊い血を流して戦歿された英霊の御霊安かれと冥福を祈ること切である。

(武田食品工業株式会社)

野中正夫 (昭一二)



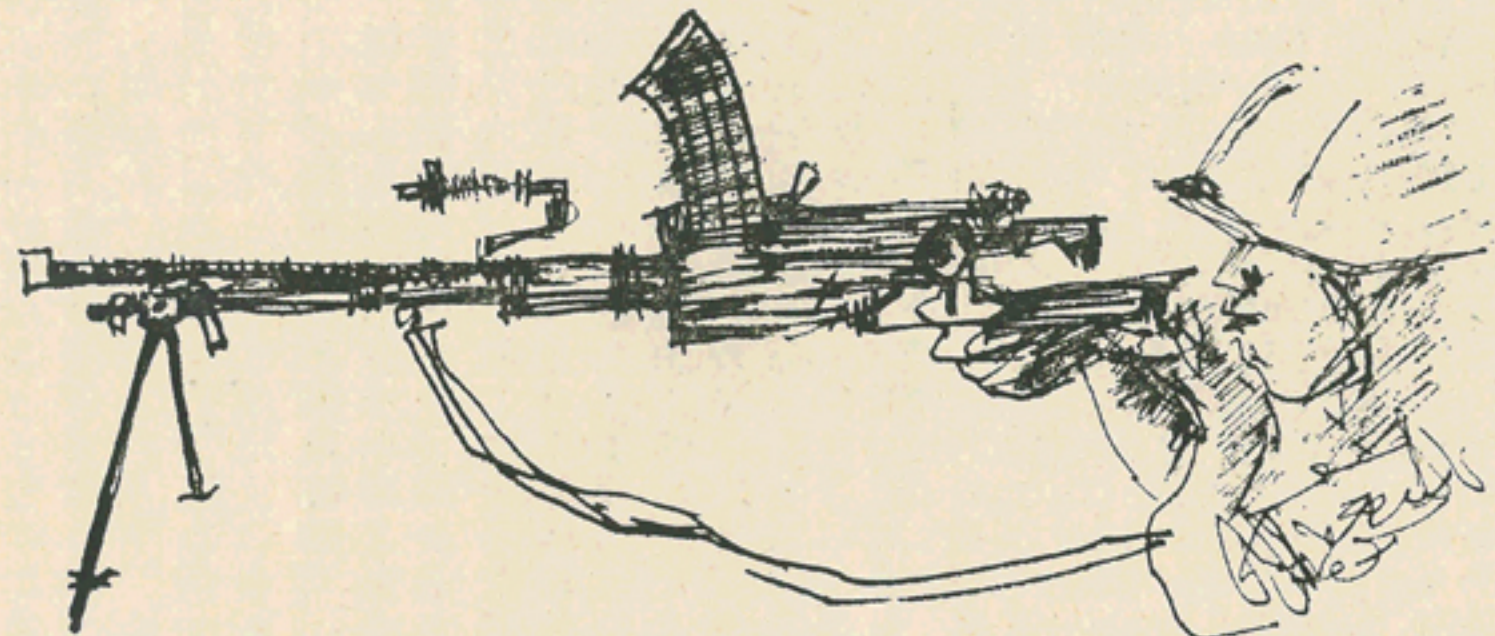
昭和十二年(第二十四回)卒業生が学窓を離れる頃は、すでに日中の関係は全面衝突を避けられない状態になっていて、学生服を直ちに軍服に着替えるという様相を呈し始めていた、今次大戦で、とくに、その前期には中国大陸で多数の卒業生が散

華しており、第二十四回も十七名の諸兄が陸、海、空の墓標となって尊い生命を失っている。このなかにはノモンハン島の船木君、アツツ島の田村君等部隊全滅の悲運とともに戦死されたものも含まれているが、私自身これら諸兄の戦中の消息を詳しく知らない。この特集に参加する資格がないかも知れない。しかし、この尊い犠牲に対して深い感謝と敬虔な追慕の念は誰にも劣らないものを持っていると思っている。私が補充兵として入隊した昭和十三年夏、高知歩兵第四十四連隊の酒保の入口で入隊三日目にパツタリ出逢ったのは機関銃隊にいた宮内美雄君であった。同君は間もなく東部露満国境に転じた。戦線が武漢三鎮に迫る頃、当時陸軍經理学校在学中の堀内(現姓千野)秀夫、高橋景則の両君から、お前の名前を妙なところで見付けたと激励の手紙を買ったことがある。その後、中支に渡り、上海近郊で集合教育を受けていたが、ある日のこと江湾駅で見習士官ばかり乗っているガソリンカーを見た。静かにホームを離れて行くのを眺めていると窓際に先れた牧田恒雄君が眼に映ったので、その車窓を追いながら双手をあげて合図したが、同君は気付かず、言葉をかかわず暇もなかった。多分転属の途中、吳淞戦跡を

見学に行くところだったのだろう。私はいまでも、それが見間違いでなく牧田君だったと思っている。中国での二年間は戦闘よりも、むしろ後方地区の宣撫工作に近い仕事が多かった。桃の花のキレイな揚州を中心としての八ヶ月間は、とくに史跡に富む土地柄でもあり、心温まる人たちが、たとえば、張医師、弟が重慶にいてという郭教師一家、小学校教育から東京で受け、日本語をキレイに話す県公署の陳君等との交流で楽しい日々であった。張医師から記念として贈られたサイン入りの唐詩選は粗末な装訂でボロボロになってはいるが、いまま私の手許にある昭和十六年夏、私は山口西部第四部隊に転属となった。その後、ニューギニア、フィリピン、満州等へ戦友は次々と転じて行ったが、終戦八ヶ月前から高知東部海岸線の陣地構築部隊に転属となった。一夜B29の爆撃で高知市が炎上するのを見上げながら研ぎ直しに出した軍刀が恐らく焼け失せてしまっただろうと考えていた。したがって私には生命を賭した戦闘の経験はほとんどない。死線を超えた誇れるほどの話もない。そして、戦争の間、多少とも接触のあった同窓諸兄は以上のように数人に過ぎないが、いずれも現在揃って健在でおられる。平和になって二十年、乏しくとも自分の家族と共に生活できることをおもうと、祖国のため散華され、また身体を失われた方々のためにあらためて深甚な追悼と感謝を捧げたいと思う。

太平洋戦争を回顧して

牧田恒雄 (昭一二)



時は移り、過去が葬り去られて行く時、忘れる事の出来ないのは緑丘三ヶ年間のあの楽しかりし青春の思い出です。緑丘四十号で戦歿学生の特集号を編集されます事を同期の横山君より承はり、太平洋戦争に参戦致しました当時の事を回顧してみたいと存じます。

運命の歯車が支那事変から太平洋戦争へと展開し、やがて力尽きて敗戦という現実と直面したのでした。それは決して遠い昔の事ではありませぬ。終戦から十九年昔流に申せば二昔前の事ですが、尊い犠牲となられた同窓生の御遺族の皆様方には昨日の事のようにいつまでも、いつまでも思い出される事と存じます。拙文を書くに当り、緑丘名簿を調べました所、古くは大正十一年卒業の大先輩から昭和二十年卒業の若武者迄、二十三年間に亘る卒業生のうち約二百五十余名の方々が年若くして戦場の露と消えられました。痛恨に耐えませぬ。

同期生では磯部浩君が昭和十三年九月十九日中支那戦線で名譽の戦死をとげられましたのが最初で、かの有名なノモンハン事変では船木庄蔵君、坂田富男君が共に壮烈なる戦死

をとげられました。誠に痛ましい限りです。太平洋戦争になりましてからは田村秀造君がアツツ島で玉碎する等十七名の方々が南に北に名譽の戦死をされました。

私も支那事変から太平洋戦争と数々の戦斗に参戦、幸にして生きて祖国の土を踏む事も出来ました。比律賓、ミンダナオ島における米軍との戦斗におきましては物量を誇る米空陸軍の熾烈なる攻撃に対してはあたくも蟻螂の斧に似た玉碎戦法で夜襲によって線香花火のような反撃をくり返すに過ぎず、密林地帯に迫込まれ、病魔と飢にばたばた倒れる戦友の悲惨な情景は未だに脳裏を離れません。戦争の悲惨さを身を以て体験致しました。

同期の戦死者の方々の名前を見まして学生時代非常に真面目だった人が多いのは彼等の誠実さが、そのような結果になったように思はれ、生き残った者として誠に申訳ない気がいたします。緑丘編集部で戦歿者の特集号を企画されました事は誠に結構な事で、この際御遺族の御動向を調査し、何等かの形で御慰めをしてはと存じます。

過般同期生が集まりましたが、そのような意見も出しましたが、言うは易くして行はば仲々難しいものです。編集部も仲々御多忙の事と存じます。音頭おとり下されば幸甚と存じます。余白も少なくなりました。戦歿者の御冥福と御遺族の御多幸を祈り筆を擱きます。(株式会社岡福商店常務取締役)

# 戦火から逃げてばかり居た兵隊

松永直中

(昭一六後)



一、学徒志召と徴兵検査  
 桜ヶ丘公園内にある小樽市会議事堂で検査を受けたのが、確か十六年十二月六日、実に第二次世界大戦勃発の二日前であった。甲種合格の宣告を受けた時、嬉しいような寂しいような興奮は到底忘れ得ない。しかし翌々日八日の大戦参加の日のマツキノン教授の悲しそうな顔は到底忘れられない。

### 二、予備士官学校生活

本籍地の聯隊で三ヶ月の初年兵教育終了後甲種幹部候補生をして仙台予備士官学校へ入校したのは確か五月であった。入校生八〇〇名の中、約一割の八〇名が樺太、北海道、東北から集まった緑丘の同期生であった。当時の若さに溢れて真剣に勉強した、われわれの気持は到底いまの若い人には理解して貰えそうもないだろう。規律ある苦しい毎日の訓練の一日室谷教授が母校のラグビーチームを引連れて京都でのインスターハイの帰途立寄られ、激励下されたことも忘れられない思い出である。

### 三、第一線配属

予備士官学校での六ヶ月の速成教育を終了し、原隊に戻つたのは十一月であった。見習士官の服装で衛門をくぐつた時は得意満面というのだろう。しかし暫らく落着くと、第一線に出られるのは何時かと、毎日腕

を撫しては居たもの、若さの掃け口がなくて張切り過ぎ上官ににらまれ、第一番に戦線に追はれる羽目となった。そして出動命令を受けた時は一瞬背筋に寒さを覚え、残った連中を睨み付けたものだった。

しかし運命と云おうか残つた連中は、その後南方に出動し、殆んど散つてしまつたのである。第一線そこは北緯四〇度のソ満国境神武屯(黒河の南方三〇軒黒龍江岸)二月の下旬の氣候に氷点下四〇度の毎日寒さとの戦いで参つてしまつた。当時のソ満国境の日本軍は最後の完全装備の虎の子部隊の東北子であった。そして最精鋭の関東軍であった。思ひもかけず、或る日隣の部隊に古館先輩(十三年応援団長)とお会いし、緑丘話で一夜を明かした事もあった。十九年、二十年と次第に戦局不利が伝へられて来る度に何時かは、われわれも南方に転戦せねばならないと覚悟はしてた所、愈々戦争も大詰におよび最終の本土防衛の決戦部隊として、北九州へ移動したのは二十年の四月であった。しかし、北九州までの海上輸送は危険を極め既に九州を目前にして消えた部隊も相当あったのである。そして四ヶ月後の終戦におよんだのである。

運命の糸に操られ、戦争に参加したとは名ばかりで一度の戦火を見ず最初から最後まで対ソ部隊とか本土防衛部隊と、もて通して来た小生には支那で、沖繩で、そして南方、北方で御苦労された方々、戦死された方々に誠に申し訳ない限りです。戦友の方々の御冥福をお祈りするばかりです。

# 一人の犠牲者も出さず

小林平治郎

(昭一六後)

緑丘を去って二十有余年すでに白髪禿頭の甚しい昨今、緑丘編集部より戦場の想出を執筆せよとの御要請あり、拙文を以て責を免れたいと思ひます。

夢多き、かつ人生において最も充実さるべき二十代を殺伐な戦場へ狩り出されたことは悔多きことが大半であるが、唯往時を回想して一番嬉しく且誇らしいことは四年間の戦場生活の中で共に残つた部下に一人も犠牲者を出さなかつたことです。

十六年十二月繰上げ卒業、翌年二月入営、北支、中支と支那大陸の各地を転戦したが、小生の部隊は軍旗のない独立歩兵大隊(将校は五十年配兵隊サンはステニ孫の居る四十代を含めた弱兵)で占領地域の後方警備専門の、いわゆる戦斗には全然役に立たない部隊、役に立たないと云つても敵(蒋介石系の国府軍、共産系の中共軍)にとっては憎い日本軍であり、盛んに守備地区に侵入して来ては攻撃する。何分兵力装備とも正規の約半分以下で正面切つて戦つては到底勝てる相手ではない。損害を受けずに治安維持の目的を達することは出来ないか?考へた挙句の結論は一陣地から出ないこと、依つて警備担当地域内の、いわゆる現地有力者と交渉、われわれは一步も陣地

から出ない但し代りに(一)希望する糧秣(酒、煙草、甘味品含む)を無償で提供せよ(当時は支給糧秣は極めて窮屈であった)。(二)慰安関係(色々の意味を含む乞御賢察)の施設を陣地内に移設せよ(三)討伐作戦は一切しないので大隊本部への戦果用小銃弾薬を差入れよ(その結果以前の部隊が犯していた、無銭飲食、婦女子への弄れは姿を消し、人心は安定し、離散していた現地人も統々帰り、町は繁忙する。また現地人の怨みによるテロ行為、通敵(攻撃要請)による日本攻撃は姿を消し、治安状況極めてよしと部隊長表彰を受ける(もつとも本部の方では差入れ戦果に添へた戦斗報告書に晒されていた訳で、聊か良心の職責はあつたが)始末、八方すべてよしの予期せざる結果となつた次第です。

苛酷な戦場であたら散華せられた、あるいは生死ギリギリの巷を彷徨せられた緑丘諸賢には大変申し訳ない次第ですが、かかる取引きの出来る恵まれた状況下にあつたとは申せ、一人の戦死、負傷者も出さず、今日嘗ての戦友諸君と往時を語り合えるのは本當に有難いことと思つております。

(東洋工業(株)管理課長)



日立商品特約店

## 日本電気機器株式会社

取締役社長 天野雅司 (大正15年)

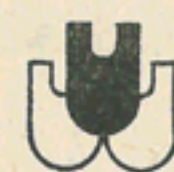
本社 サクラバシ日立シヨーストール

大阪市北区曾根崎新地2丁目50番地

電話大阪 (361) 8871 番(代表)

大阪 (361) 4602 番(夜間専用)

# 広告マツクと美術印刷・紙工品



## 株式会社 三優社

京都市下京区寺町通松原下ル  
TEL. (35) 0271・4950・7713  
取締役社長 山村太兵衛 (昭12)

是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕



# 緑丘の犠牲者を偲んで

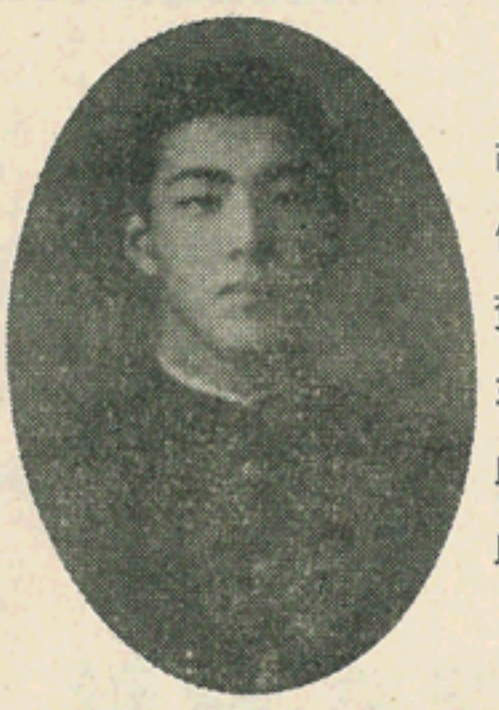
本間 広松 (昭八)

戦後二十年平和な日々が流れ続いてはおりますが、戦争は人類世界より永久に無くならないものでしょうか。歴史が教えてくれているように生あるものから斗争が不可避であるという絶対前提があるとすれば宇宙という大きななかの一単位としての地球上はさておき他の惑星の世界にまかせ、せめて地球上だけは平和が永久に続くという現在より未来を望まれないものでしょうか。

不幸にして、われわれが生を続ける青年期に戦争という斗争があった。この度の戦争の直接の犠牲者を緑丘同窓会名簿より拾って見ると、

同級生だけで、米沢四郎氏、荒木田敏郎氏、本間健三郎氏、井出正雄氏、片山四郎氏、工藤益次郎氏、六氏を見ます。皆私のマブタに浮ぶ学友であります。洵にさびしき思ひになるのは私一人ではありません。犠牲者緑丘人へのはなむけとも考え拙筆をふるう次第です。

筆者も兵隊という生活を四年経験しました。戦斗にも勿論参加し、遂に負傷までしました。右六氏より悪運強く生きて帰りましたが、戦斗の思い出を書くことは私は好きではありません。それは、正しい者が生きて帰られることではなく、悪しく(あ



故 加賀三郎氏

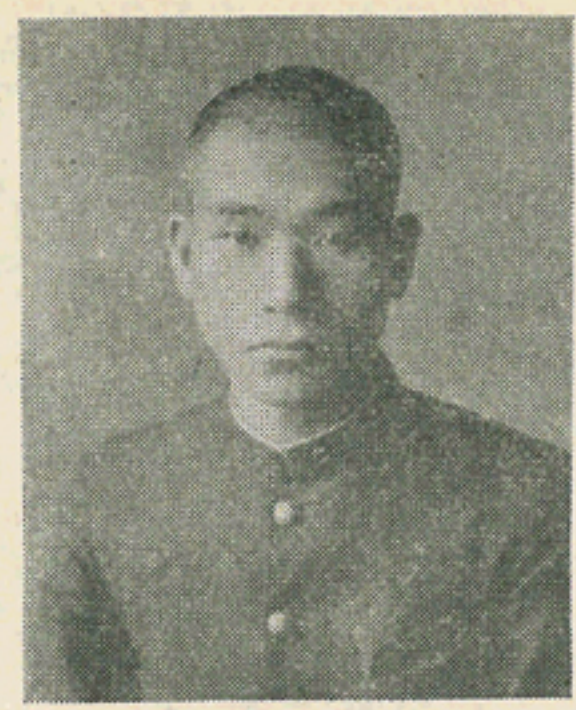
私は昭和十三年十一月第一補充兵で衛生兵として旭川に召集されました。(糸魚川先生、あの時は激励ありがとうございました)同じ衛生兵のうちに緑丘人は昭和十一年卒の佐藤六郎君(後記)がおりました。前学長大野純一中尉(大隊本部付)の歩兵としての検閲も受けました。旭

川陸軍病院で衛生兵教育を受け、翌昭和十四年四月、北支に派遣されました。見習士官と衛生兵半々位、その時の派遣者であり、輸送指揮官が昭和十二年卒の加賀三郎見習士官でありました。派遣先は北支独立混成第七旅団、この旅団本部には、五味君、四谷君(中隊長で負傷)藤田主計中尉が将校として居られたと記憶して居ります。藤田主計には商河でお逢ひ御世話になりました。われわれのように兵卒の者は沢山居ったのでしよう。

さて、昭和十二年卒加賀三郎見習士官の思い出を書きましょう。

加賀三郎見習士官と私が同じ独立混成第二十九大隊付となり、加賀三郎見習士官と小生が第一中隊付、佐藤六郎君が第三中隊付となりました。本部の申告場所には遺骨がぐらりと列んで居るではありませんか、之では生きて帰れまいと覚悟させられたものです。

加賀三郎見習士官と同じ中隊ですから小生は運があるわいと思つたのもつかの間、一ヶ月も経たないうちに加賀見習士官は戦死されました。河北省大コウカンの戦斗でした。まゝ二日敵と対陣し、最後の突撃をする一瞬前加賀見習士官は当番の手榴弾をむしり取り、右手を後方に廻し將に投げんとした、その瞬間、敵弾が前頭部に当たり、パツタリと斃れました。そう烈な一言に尽きる最後でした。私は戦死を確認せざるを得ませんでした。御遺族(電気館通り加賀屋旅館)を御訪ね申上げ、英姿の写真を見た時はほんとうに残念に思いました。口数少い、ニガミパン



故 佐藤六郎氏

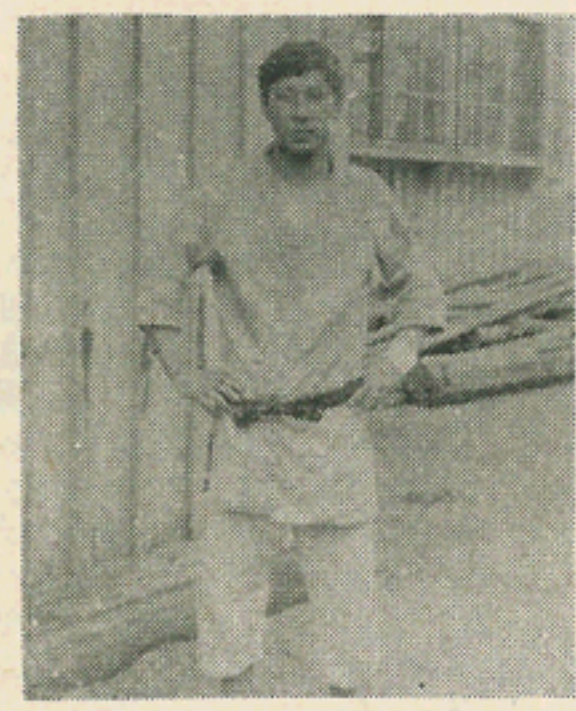
夕、立派な体格の頼もしい青年将校でありました。

佐藤六郎君の思い出を書きましよう。衛生兵六名が大隊付となり、私は一中隊、佐藤六郎君が三中隊に配属され、約二年間同じ大隊で過したのです。命令、命令の生活のなかで何時しか不帰の人となった者は、同時派遣された将校八名中六名、衛生兵六名中、二名残り戦傷帰還者を含め、まづ帰れた中に小生も居った次第です。佐藤君はかなり重い負傷を受けましたが、入院帰隊したのです。衛生兵四名中一名はどうしても

なり沈没、不帰の客となりました。

佐藤君か小生か、何れか一名下士官要員として残されることは大体判って居り佐藤君に君は若いのだから残れ、佐藤君は、いや先輩で上だからと二人とも先に帰り度い為め、相ゆずらぬ工作をしました。軍医は小生に命令を出して二、三日出張、ごろつく相手を失ひ、しぶしぶ北京陸軍病院の教育に派遣されてしまいました。佐藤君は先輩の小生に帰還を譲れば二人の人生も変って居ったことでしょう。佐藤君は小柄な、意志の強い実に優秀な緑丘人でした。

故 米沢四郎氏



下士官を出さねばならない。下士官になれば、さらに一年や二年は帰還出来ないということから軍医に下士官にならないような工作をしたものです。どんなでたらめも出来たわけです。しかし、作戦の編成表に載せられるのが何より痛い、色々なことがありましたが、結局小生が残されたのです。佐藤君は喜んで本間さんお気の毒ですの言葉を残して一足先に帰還されました。人間の運命とは、彼はギングー木村(フイリピン派遣員)に帰り、太平洋の船上の人と

小生は昭和十七年大東亜戦争初期無事帰還、結婚、日本に居れば、また召集されることを考慮して大連に転動させてもらいました。在満中は緑丘人の沢山の方々に大変世話になりました。この紙上を借りて御礼申し上げます。

私は米沢四郎君の告別式に参列したのです。彼は柔道部のキャプテンであり、応援団長でありました。小生が庭球部の代表でありました関係から忘れられない思い出があるのです。予算会議が夜おそくまで続けら

れ、どうしても庭球部の予算が最後迄認められませんでした。時の指導監督者苦米地教授が認めてくれなかつたように記憶して居ります。もみにもんだ最後に彼米沢四郎君は、各部が認めるなら、応援団費、予算のある一部を庭球部に譲るという提案をしてくれた彼の顔、姿は未だ忘れられないのです。卒業、別れて再会の時を得ずして私は彼の告別式に出るとは、彼は卒業後東亜同文書院、卒業、満洲国の前途ある青年官吏となり、熱河省の副県長になったのです。副県長とは実力の県長、直属の満洲軍を指揮下に、県政と治安の責任者として努力したことでしょう。熱河省は北支への国境、満洲国としては最も治安の悪いところ、終いに満洲国治安保持のため、熱河の尊き犠牲者となったのです。彼のことである。戦死すべくして戦死したこと信じざるを得ない。武者小路実篤作「あかつき」に出る若き学徒出陣遺稿集のなかに出るような、彼の遺稿があるように思えてならない、私は彼の戦死を大連にて満洲紙上で知った。そして新京で行はれる彼の告別式に馳せ参りました。私の知る範囲においては、彼程立派な告別式をして貰った緑丘人は居ないのではないでしょう。葬儀は張國務総理、青木総務長官始め在満の最高位高官列席で行はれた。けだし尊き犠牲者である。

筆拙く悲惨な戦争の記録を充分表現出来ぬのは残念ではあるが、新しく育ちつゝある若い世代が人間の破壊、崩壊のむごたらしさを充分知ってほしいものである。

湖畔のいでゆ  
**東 郷 温 泉**  
 国際観光旅館  
**湖 畔 荘 鶴 乃 湯**  
 館主 山田善之助(昭9卒)  
 山陰本線松崎駅前 TEL(松崎) 1 5

# 故大塚金恵君のこと

北条 恒一 (昭一四)



は毛むくじやの髪ではなく、いかにも凛々しい海軍士官であった。当時の私といえは、「何故、負けることのわかつている戦争を日本が始めたのか」と悶々の日を送り、しやべることも書くこともできない檻の中にいた。

いつも毛むくじやらの髪で、時にアコーデイオンか何かかゝえていた大塚君は、またラクビーをやらせればよいフル・バツクであった。彼が静岡県の島田へ帰省するとき、よく一緒になり私は東京なので上野駅までくると、ビールの飲みすぎがたつて、二人の財布を合わせて十何銭しかないこともあった。その彼が、それから何年もしないで逝ったのである。

海軍予備学生として台湾で教育された彼が、霞ヶ浦の航空隊で訓練を受けるために上京してきた。上野駅で東の間の面会をした。何ヶ月もしないで彼は戦場にかりたてられることになった。その間彼から電報がくると私は上野駅まで迎えにいった。海軍独特のマントの下に、彼はままでいうほんもの特級酒を抱いて階段を降りてきた。その足で九段の辺りで痛飲をしたものである。その頃

旅立つ前の彼の気持を一番よく書いたのは彼女であった。その次が私であつたらう。彼のその気持を女々しいという人があるかもしれない。しかし、戦いの無益さを知っていた彼や私からすれば、当然の言葉だつたのである。だが、彼には死を急ぐ家庭の環境があつたのである。それ

# 故篠田中尉(昭九)どの

墓目 英三 (昭一一)

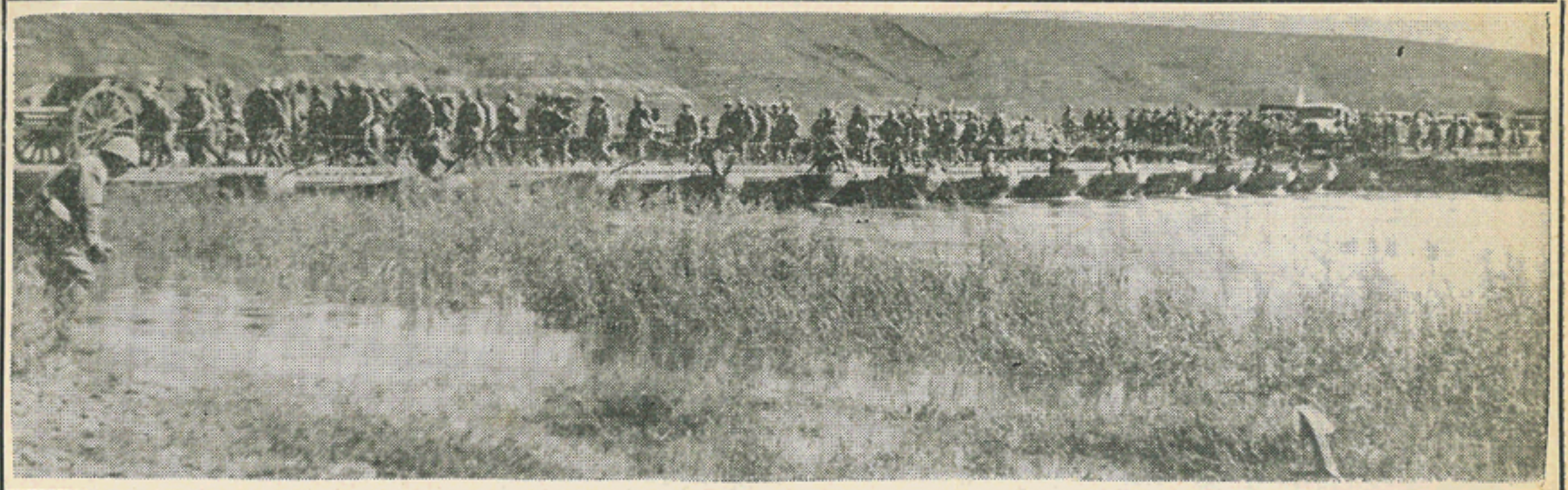
ノモンハンの戦斗に参加した緑丘人の中でチチハル以来親しくしていた篠田賢治中尉は聯隊の中でも温厚な青年将校として定評があつた。口数少く、静な口調で初年兵の教育に励んでいた。

昭和十四年動員下命、われわれはチチハルの兵舎を後にノモンハンに向つたのであるがハイラルから約一週間の徒步行軍が続いた。雨の日、晴の日、足がフヤけて平坦な道ではあつたが決して楽な行軍ではなかつた。

彼篠田中尉は第一大隊に居つたため將軍廟に着いた頃には各々別々の任務につき顔を合わす事もなかつた。七月二日われわれの所属する須見部隊にソ聯陣地攻撃の命が降り、ハルハ河を強行渡河して敵陣地夜襲に決つた。どうした事か私の率いる一個小隊

をいまは語るまい。——こう書きながら私は涙が流れてくる。そして彼の葬儀に列した。たったひとりの友人として、語る言葉もなく「なんだって、お前のようなよい男が死なねばならなかつたんだらう」と叫んだ記憶が生々しい。

のみ將軍廟飛行場の警備をする事となり、須見部隊と別れて飛行場に向つた。七月四日になって、嶺線を越えてトラツクが二三台続いてこちらに向つて来る。腰の眼鏡を出して焦点を合せて驚いた。全部真黒くなつた死体の山であつた。その中の一台が方向を転換して、われわれの方に向つて来た。全部血まみれの傷兵であり、片足のないもの、片手のないもの、腹をえぐつたように血をふき出しているもの、何れも三角巾で負傷箇所をくくつてはいるもの、血に染つて黒くなり、悪臭を放つていた。われわれ小人数でこれらの傷兵をトラツクから降ろして草原にならべた。この傷の痛みには声を限りに泣いていた。医者が居る訳けでもなし、手のほどこしようもなかつた。一人一人抱えてトラツクから降ろしているうちにトラツクに残つた傷兵



7月3日、ハルハ河渡河 この中に篠田中尉も軍旗と共に

に何処から来たか沢山の蠅が唇、まぶたに黒くたかっていた。昇天したのである。

上空には友軍の弾薬を塔載した飛行機が今弾薬を降した許りで空へ飛んで行つた。もう少し早やければ、この傷兵たちを助けられたと思うと残念でならなかつた。

次から次へと目の前でダン末魔の苦しい悲鳴をあげ、或はウーンといつた切りで、この世を去つて行つた。また弾薬を塔載の飛行機が上空に見えた。軍医殿、軍医殿とのむ、助けてくれ。軍医殿と痛む傷を押え不自由な血にまみれた手、足を引きづつて私の足にしがみついた。どうすればよいのだろう。たつた五人より乗れない飛行機に二十数名の一時も猶予のならぬ患者を目の前にして私も泣いた。また一台死体と傷兵を満載のトラツクがついた。一体どうすればよいのか。

部下に負傷兵を降ろす事を命じ、自分は前に着いた、助けて助けられる而も飛行機のなかで死ななくてもすむ生存可能者の選択に手取り早く診断を開始した。飛行機のなかで立つて行けるもの、横臥したま、ハイラル野戦病院で弾を抜いて助けられるもの、Lの字型で飛べる上半身負傷者、手、足が真赤にハレ上りエソを起こして切断を急ぐものなど、五人の組合せを考え、六人までつめ込んで飛行機で飛び立たせた。誰の顔か一人として顔は思い出せないがトラツクの上で無惨にも命を断つて行つた二十代の顔が何か目に見えるようである。赤い満州の夕空に下ス黒い雲が突

然近付いて来た。驟雨である。十数名の天幕を背囊より取り出させ、天幕張りにかゝつた。すでに傷兵は五十名を越えるであろう。この驟雨にどうする事も出来ぬ。勿ち湿地帯になり、これら負傷者は天のなすまゝに水に浸つていた。やがて天幕が出来、廻りに溝を掘つて水を流がし、負傷者をかつき入れた。飛行隊のムシロを敷いて一応休息さす事が出来た。

水！水！水をたのむ、というシャガレた声の方々が聞こえる。何んとかして明朝まで命をもたせ度いもの許りが入つてゐるのだ。すぐ飛んで行つて懐中電燈で照らして見た。腹の中に大きな口を開けて呼吸の度に血をふいている兵である。もう駄目だ、それ水をのめと死を知りつゝ水をのます苦しきは胸をかきむしられる思いであつた。雨が上つてやれやれと思つたら、蚊の襲撃である。天幕の中は血の臭いで一杯であつた。ウナリ声の一夜であつた。

次の日もまた繰返えしであつた。雨が降らなかつたのが幸いであつた。結局トラツク五、六台で私の所への負傷者は止まつた。数日後の夕方であつた。墓目少尉出動の命が降つた。

愈々早朝大攻撃開始、墓目少尉は下士官四名をつれてハルハ河、ホルステン河の川又地点の敵状を偵察せよ、霧の中を右に敵戦車の音を聞き敵陣深く浸入した。戦斗の模様を書くのはまたの機会がある。七月二十四日の再度の攻撃で私の下顎から舌の付根をつき破つて頭の

中にソ聯の砲弾の破片がえぐりさつた。幸か不幸か自分のやつて来たと同じコースを飛行機でハイラルの病院に運ばれた。舌が口からたれ下つて紫色にはれ上つた血だらけの顔で。七月三日、四日の二日間の戦斗の模様は後で聞く事が出来たが、その中に篠田中尉も加つて居つたのである。須見聯隊長は彼の優秀さを買つて聯隊副官にしたのだ。非常に緻密な頭を持って自分の作戦判断に協力してくれたが敵陣に夜間突撃の時、敵弾に倒れた事は全く惜しみても余りあると涙をおさえて語つておられた。

七月三日、四日の戦死者、負傷者を生き残りの将兵が協力してハルハ河を退却時に涙と共にかゝえて退つたという。篠田中尉、もつとあなたの手を書き度い將軍廟で別れたきりで残念である。沢山の緑丘人が私と同様冥福を祈つて下さる。今戦歿学生特集号を発行し、昭和九年卒の篠田中尉はこんな戦の中で歿した事を伝えたい。

苦米地 千代子  
学半ば皇国の急に馳せ参す  
秋のうるしの紅葉する朝  
流星のたまゆら空にかき消えし  
そのみいのちの曳光に哭け  
ふるさとの春の光に咲く花を  
愛でたまうらんみ魂かえりて  
おほけなくわれ等も同じ名こそ負え  
この軍神に母おはします  
「籠る命」から

# 純真で果敢だった彼ら

鈴木 信 亮 (昭一七)

先日しばらくぶりて札幌へゆき、沢村さん(北海道放送映画)坂口(新宮商行社長)相川(新宮商行)小笠原(電通)君らとグランドホテルで一緒にメシをくった。

談往時におよんで「伊吹、坂西なんか居られたらなあ」を期せずして戦死した元気のいい級友を思んだ。私どもは卒業を繰りあげて兵隊に行つた訳ですが、素朴純真で勇猛果敢だった者ほど戦死した数が多いように思う。これは空中勤務者を成績のいい、体力気力の優れた者のなかからとって行った(というよりは自ら志願したのであるが)故であろう。伊吹練三君も、坂西正君も、いま大阪商船三井船舶のニューヨーク支店に在る竹谷伍郎君と同じく関西から来た異色の存在で共にラグビーの選手であった。両君とも特攻隊でダツシユして行ったというのだが、いま居つたら、どんなに愉快だろうと追憶が限りなく浮んでくる。

ある日の午後、ブランクたるべき時間を金融論の糸魚川教授が午前に引続いて、午後もやることになった。先生が教室に入って来て黒板をみられると

「糸はんの顔も日ににんどはあきまつせ」と大書してある。言下に「こんな事を書くのは伊吹君しかないだろう」

と正に凶星であった。一年の時、北大とのラグビー試合で勝ち、竹谷君が祝勝会のビールで猛烈な下痢をしたことがあった。はじめは便所まで行つていたがあまりに頻繁で、とても便所までゆけない。二寮の東端で竹谷君と同室だった私は隣室の坂西君と二人で彼を庭につれ出し、満天の星を仰ぎながら、何回もなく用を足させた。この腸炎は長びいて竹谷君は入院したが、略々回復したある日の午後、坂西君と二人見舞にゆき、暖かい陽ざしのベットにもぐり込み、三人枕を並べて寝ていると、ちようど、この時苦米地校長が見舞に來られ、起き出す暇もなく、実にあわてたことだった。

テニスの牧野顕吉君は特攻機で沖繩に突つ込んだはずだが、その出発の前日訣別の放送があり、当時内地にいた私は彼が淡々とした口調で「では、私は好きな江差追分でも唱いましょう」と朗々たる歌声で歌つたのを聞いた思い出がマザマザとよみがえって来る。

こゝまで書いてきて、会員名簿を開いてみると、さらに親しかった幾人もの級友の戦死が想いかえされ、御家族の痛惜無念さは、どんなかと思わずには居られない。

(久保田鉄工株式会社)

# 戦歿同窓を誇りとする

若山 永太郎 (昭一三)

足掛け九年間、戦争中軍人生活を体験して来た緑丘人の一人として、こゝに敢て一文を草し、同窓各位の御批判を仰ぐ次第である。

去る九月十日の大阪支部十日会席上、墓目兄の肝入りで、北海道放送より放送された「丘と海と白い雲」と云うテープが披露された。

このテープは松尾正路先生が語り手で、戦時中緑丘より学徒動員等で次々と若い元気な緑丘学徒を戦場に送り出し、戦争の犠牲となり、其の尊い命を捧げた数々の戦歿同窓の出陣の状況と、その遺族の方々の悲しみを松尾先生の例の独得な口調でトツトツと語っておられるものであ

同十日会はいつよりも多くの会員が出席されたが、出席者一同深く感銘を受けた次第である。

大久保鹿式大先輩を初めとし、出席の多数の同窓は、こみ上げてくる涙にハンカチを取出して、目がしらすをおさえて居られた。

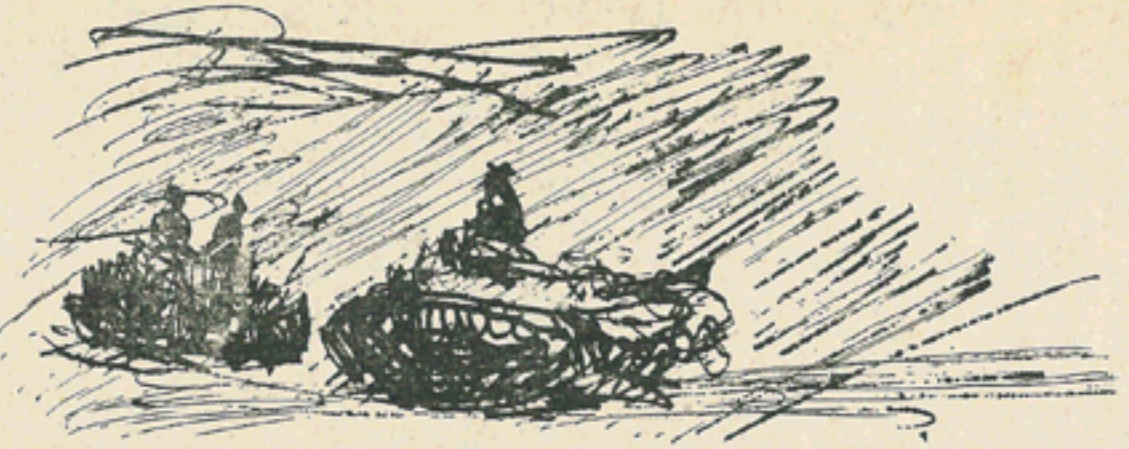
私のように九年も戦地を歩いたが元気で帰つて来た者に比べて、戦歿した同窓は本当に気の毒である。殊に遺族の方々の悲しみにむせび泣く声をテープを通して聞いて断腸の思ひすらした。

テープを聞き終つて、出席者からそれぞれ感銘が述べられた。一様に「戦歿同窓は本当に気毒である。なんとか早く戦歿者名簿を整理して追悼慰霊祭をやりたい」という意見が圧倒的であった。

ところが最後に、御出席の椎名幾三郎先生が立上つて、御感想と御意見を述べられた。

椎名老恩師曰く——「先程から皆さんより、戦歿同窓は本当に気毒で可愛想である。早く追悼慰霊祭をやりたい」という御意見が述べられた。私も同感であるが、皆さんは重大なことを忘れて居られるのではないかと思う。それは……

先般アメリカから留学生がウチの大学(関西学院大学)に来て、最初



に「当大学で最も誇りとしている場所すなわち戦歿学生の墓地に案内してほしい」と申出られたので、ウチの大学の戦歿学生墓地を御案内し、手入が行届いて居らず恥しい思いをした次第であります。アメリカでは大学の最も誇りとするところは戦歿学生の墓地だそうであります。ところで皆さんに申上げたいのは……

戦歿同窓は誠に気毒であります。可愛想であります。しかし戦歿同窓は其の尊い命をわれわれの国の為めに捧げたのであります。まことに尊いことでもあります。われわれが同窓として、これは本当に誇りとするべきことであると思ひます。

だから、戦歿同窓を可愛想、気の毒と思うと共に、われわれは日本の国民として、しかも同窓として、このことは大いに誇りとすべきだと思ひますが、我々日本民族の精神こそ子孫に受け継がせねばならない(文責筆者)と老恩師は熱をこめて語られた。

私は椎名先生のこの御言葉を聞いて愕然とした。それは戦後我々が忘れてしまつて居たことをピシヤリと指摘された気がした。

敗戦によつて国は焦土と化し、台湾を失ない、さらに満州、朝鮮、千島、樺太を失ない、国民は一時虚脱の状態におち入つた。これで再び立つことが出来ぬかとまで思われた我々も、幸いにして、その後幾多の困難を乗り越え、今日の殷盛を遂げることが出来た。

しかし、敗戦二十年近く過ぎ、戦を知らぬ人達が、すでに青年に達し、立派な社会人となつて居る。

技術革新に貢献する



## 丸嘉機械株式会社

大阪(本社)・東京・名古屋・岡山・広島・姫路・仙台

## 緑丘会計人会

計理士 大竹正雄 (大正12年)  
計税 理士 大竹正雄 (大正12年)  
神戸市東灘区本山町中野千田45

計理士 香川清夫 (大正13年)  
計税 理士 香川清夫 (大正13年)  
大阪市南区安堂寺橋通1 安堂寺橋ビル 電話065320番

計理士 玉井英夫 (昭和4年)  
計税 理士 玉井英夫 (昭和4年)  
富田林市大字毛人谷427 電話(07212)2348番

計理士 宇山慶三 (昭和4年)  
計税 理士 宇山慶三 (昭和4年)  
大阪市生野区北生野町3の4 電話037723番

計理士 森川正明 (昭和12年)  
計税 理士 森川正明 (昭和12年)  
大阪市西区阿波座通1の12 扶桑ビル本館2階 電話032013番

これらの人々は止むを得ないとしても、戦争及び敗戦を身を以て体験したわれわれ大人どもまでが敗戦の惨めさと共に国を愛するということまでも流し去ってしまったのだろうか……。

われわれは、戦争及び戦時のわれわれのやって来たことは、すでに誤りであるとキメてかゝってやっていたようだ。「衣食足って礼節を知る」といわれている。経済もここまで立直って来た。勿論至る処ヒズミなるものが出て来て居るが……。このヒズミと簡単にいつていることの底に、われわれ大人どもは勿論のこと国民としての心の反省を必要とする数々の要因が横たわっているのではなからうか……。

### 在天の英霊よ来れ享けよ

竹谷 伍郎 (昭一六後)

欧米先進国の文明を取り入れることも大いに結構である。しかし文明の表面だけみてはいけぬ。其の底にあるバックボーンをよく知らねばならない。そして我國の伝統と思想のよい面も大いに反省してとり入れ、欧米の文明と共によく咀嚼して、より立派なものに発達せしめることが今日の日本の凡ゆるる面に亘って必要な急務ではなからうか。

戦後同窓追悼の問題に就いても然りである。成程戦争で死んだものは馬鹿をみた。何んら報われて居らない。いわゆる「死に損」であるかも知れない。しかしそう簡単に片付けてよい問題だろうか……。

彼等は国のために其の尊い生命を捧げたのである。決して自己の功利や利欲のために戦争を行ったのではないのである。このことを、われわれが、いま一度反省しよう。そしてわ

が伝統ある緑丘学園の中で最も誇り得るものは、それは立派な校舎でもない。学生会館でもない。それは一國のために尊い生命を捧げた戦友同窓の墓地である。——とわれわれ同窓が胸を張って誇り得るようにしたいものだ。

勿論、二度と戦争はしたくない。平和はあくまで堅持せねばならぬ。そのことは「戦友同窓を誇りとすべし」とことと決して矛盾することではない。

想へば京都くんだりからわざわざ小樽まで勉強も出来ないくせに草ラグビーだけをやりに行ったような男が居たが、何の因果か知れないが、この男に付きあってくれた男達が何人か居た、そして繰り上げ卒業で皆戦争に行った。戦争は終わった、仲間の家を尋ねて歩いた。しかし彼等の殆んどは帰って来なかった、草ラグビーはそれで話としても消えてしまつた。

安久英造 シヨベイ、漢字で書けば誰でもわかるムツツリ何とかでいづも静かにニクニクしていた、ビルマ戦線で死んだのか、消えたのか。

伊吹練三 南方海上に於て名譽の戦死、輸送船でボカチン喰って何が名譽なものか、マア文句を云はんと酒を飲め。

大塚通 実家が大阪市内の焼野ヶ原となつて消息の尋ねようもない。学生時代からの顔色の悪さから、ニユーギニヤ辺りで栄養失調になつたように想像される。

北村研一 愉快な少年でした。高商の庭の直ぐ下に家があつて君の姉さんや妹さんに随分色目を使つたゴミが居た、血気旺んだつた君が伊吹同様に南方海上で云々では残念であつたらう。

坂西正 一年から二年の時一緒に落第する約束が何かの間違いで俺だけ進級した。悪く思うなよ。特幹とかで朝鮮の飛行場で練習中死んだと聞いた。二寮も一緒、下宿も一緒だったのに……。

西久保平チャン 之は生きて居る釧路の国松君 便りがないが生きて居るらしい。

死に損いと云うより死にたくても戦斗のない台湾に居ては死ねなかつた。自分を入れて、昭和十六年後期卒業ラグビー部員八名中五名戦死、三名生存という次第です。

次に身内の事に及んで恐縮ですが小生の兄が一年以上同じラグビー部におりました。彼もビルマ戦線敗退途上、誰も目撃する者もないような処で死んだらしい、陸軍兵長だか伍長と書いて中て何かがカラカラ音のする木箱が届けられて来ただけです。

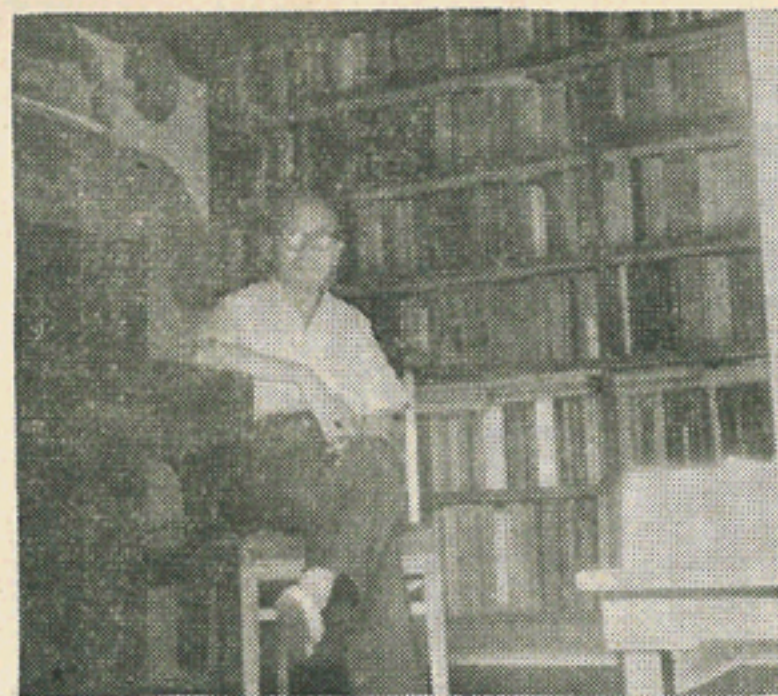
ラグビーでもやつたような男達は勇しくて華々しい戦死でもしたのかと思はれ勝ちですが吾々の仲間で自分の知る限りでは皆が皆悲惨であつたようです。しかし彼等について想い出されるのはたわいなく、しかも懸命になつて汗を流したあの山上グランドでの元氣一杯の姿です。

「今日は練習を早目に切り上げよう、直営で黒ビールのチョッキの出る日だ」と云つた男も居た。

(大阪商船三井船舶ニューヨーク支店)

### 僕の書齋

神部 健之助 (大12)



学窓を出て四十数年、蒐書に興味を持ち、現在書籍ならびに資料三万点を所蔵、書庫も別棟の風月楼文庫と本屋の汗牛洞の書棚とに別けて在る。

風月楼文庫は書誌界の先輩故齋藤昌三翁の命名したものだ。本を蒐めると最後に古写経までゆく、古写経も天平を始め十数巻蒐め写本、古版本さては珍書、稀書の類が所狭しと高く積んだりしてある。毎日のように来る古本目録や、古書展の案内目録に二度宛目を通して物色する。

知識の泉の古書展覧会には、開場前に行つて、開くと同時に業者の多くと会場になだれ込み、目星しい本を手にした時の愉快さは、恋人に会つた時以上に胸のときめきを覚える開場迄玄関前に立並び、業者の話や聞くと、古本業界の縮図の感がする。

筆者のような、一を以て離れず、四十数年来の書痴も妙い事だろう。図書館は別として浜随一を誇る書庫である。

戦後、財産税の頃、小説並にやわ

らか物三千冊程を、四国の某家に数万円で御譲りした、金に換算したら数百万円の事だろう。

いまの在庫は、随筆物、美術関係物、歴史物に一応統一、それに関する資料が、また尤大なもので、文士名士の書簡類でも岩崎弥太郎はじめ数千点、原稿、短冊、色紙書画類でも略古庵蔵品二千点を下らぬと、豪語し得られる。その他渡辺華山の下絵や、筆写類の数十点等、好事家の垂涎おく能わざるもの、先年恩師佐原貴臣先生が来宅されて、「神部君は小樽の異色だ」と呼称していられた。

小樽出身者には変り者が多いが、筆者もその一人らしい。

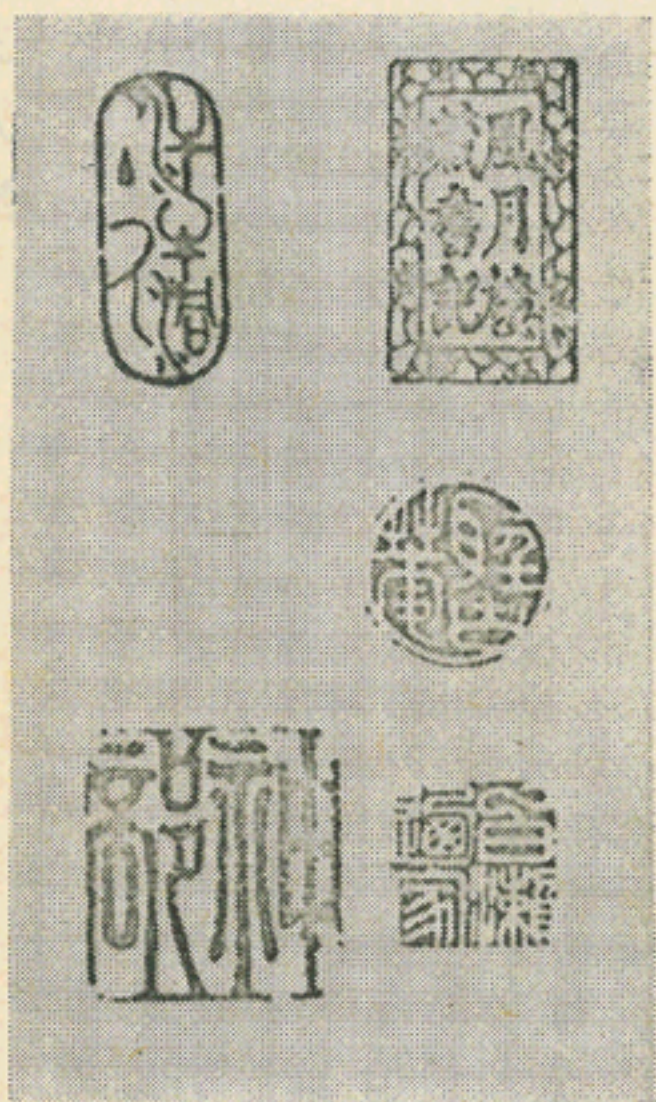
珍本の一、二を紹介すると、幸徳秋水の獄中の手沢本や、新渡戸先生の随想録に出ているカーライルのサルタスレザスタスの手沢本等、他では見得られぬ、稀覯本が山積している。

万巻の蔵書のなかに埋もれて、生活し得られる紙魚の幸をヒシヒシと感ずる一人でもある。

(神奈川大学講師)

風月楼文庫

### 蔵書印



冷暖房及び管工事全般設計監督施工

## 日邦工業株式会社

取締役社長 井 兼 政 市  
相談役監査役 宮 地 邦 介 (大11)

大阪市西区南堀江通1丁目2番地 電話大阪 (531) 8461代 ~5番  
出張所 堺市浜寺石津町東2丁目702番地 電話堺(0722)③2642番  
工場 同 上



# まんびつ五人集

## 次回

墓田目  
隈田木  
佐々木  
増田嶋

英三(昭一一)  
鑽三(昭一四)  
成彰(昭一二)  
常次郎(大一一)  
恒二郎(昭二)

### 人生僅か五十年?

木村 頼雄

(東京支部)



何時の間にかという  
と嘘になるが、数えて  
見ると正に五十才、昔  
なら人生僅か五十年の  
幕切れまで来ている勘  
定だ、良く大過なくこ  
ゝまで来たものだと思  
感する。往時に比べて心身共、さし  
て老い込んだとは想はぬが、何かの  
拍子に意外な処で突然嘗ての日の自  
分と違ふ事がある。誠に不本意で  
あるが、これは生物一般の宿命とし  
て諦める事にした。

これから先五十年、いやこれは無  
理だ!!三十年、いや良いとこ二十年  
かな?下手をすれば、少くとも十  
五年は必要だが、さて生きられるか  
な?エーイメンドウだ、考えない事  
にしよう!!何とかなるさ。

しかし間違いない、今迄生きてき  
た年数だけは生きられないという事  
実を覆ふべくもない。想ふに多くの  
人々は、いづれの日にか必ずやつて

くる諸々の不快な事柄に対しても、  
これを一応忘れた事にして、とも角  
今日を過すという生活をしているも  
の、ようだ。若い人々、未来が過去  
よりも遙かに洋々としていっていると思は  
れる人達は別として、われわれ年代  
の多くを今日まで、こつこつと過  
してきたという。その事実にすがつ  
て日々を送っているのではなからう  
か。したがって一度不測の異変が身  
辺に起るとどうも話が違ふと果然自  
失と、いった状態になり兼ねないよ  
うだ。しかし来るべきものは常に来  
つゝあるのであつて只単にその時の  
みが未だ明確に決定されていないだ  
けなのである。

現代社会の成長、変革の急テンポ  
のなかに身を置く限り、自分の周辺  
を常に冷徹な眼で見つめながら、生  
きて行く事は仲々困難な事であるが  
その極限に向つて押し進める微妙な  
力が秘められているではなからう  
か。文化極まる処、人智極まる処、  
果して有か無か。

物事には自ら可能な限界がある。  
従つて常にその限界に到達しようと  
いう意欲のある限り、その近く迄行  
ければ以てメイすべしではなからう  
か。この世の中には多くの鬼と称せ

### 闘病の思い出

沢井 道成

(東京支部)



緑丘会報の第十六号で、  
先輩青木時男氏の「闘病生  
活十周年」が掲載されてお  
りました。当時多忙に紛れ  
て一読したまゝ、つい忘れ  
ともなく、忘れておりました  
が、今度改めて同手記を  
読み直し、氏の十周年に亘

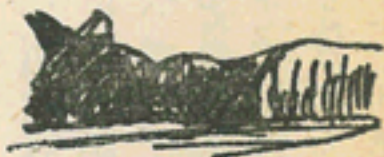
転動現在に至つております。  
安静と栄養以外に手の施しようの  
なかつた武男と浪子の時代であつた  
ら、おそらく四十に達せずして、  
この世におさらばしたのであらうこと  
に思いを致し、いまさらながら近代  
医学の発達に感謝している。  
早いもので職場に復帰して既に六  
年有余、毎春秋二回の健康診断があ  
るが、われわれの場合は別格扱いで  
特に精密に検査される。最初のうち  
は療養時代の印象も生々しかつたが  
最近喉元すざれば熱さ忘れるで、  
定期の健診の時になつて思ひ出す  
という、いささか不心得になつて来  
た。

病氣をすることは人生の借になる  
のか、貸になるのか、何れにしても  
各方面のお世話になるから借になる  
と考えられるが、この借を今前の人  
生において返す方法は結局は、その  
人自身がより健康で幸福になること  
である。かつては死亡率第一位を  
占めていた結核も医学の発達によつ  
て死亡率が激減した結果では余り論  
議されなくなつて来ているものの、  
同窓各位のなかには、この病氣の経  
験をされた方も相当おられると思  
う。お互いの健康と明日への幸福  
のために大いに頑張らましよう。  
次は寮友隈田鑽三氏にお願いしま  
す。(昭一四、雪印乳業株式会社)

### 情 緒

山 村 太兵衛

(京都支部)



近ごろいゆるるタイム  
クトメールばかりの世の  
中で、広告マツチ専門の  
我が社でも多くのパーナ  
どからお客寄せの印刷物  
の註文を頂く。営業の若  
い人の中には、ありきた  
りの文案が種切れになる  
と、週刊誌などから適当にこま切れ  
拝借をして結構お得意先に喜んで貰  
つていられるのである。幸に独創的な  
すばらしいものを考えたと云つたと  
ころで、コピーライターに依頼する  
程の予算も貰えないし、時間もない  
文案無料サービスのケースが殆んど  
である。曰く

紅葉まつり、×周年記念、節分  
ゆかたまつり、改装記念、クリス  
マスETC.....  
そこで余り文才豊かでもなく、且つ  
そうしたムードに平素親しみ慣れた  
い私にも片棒かつぐ一役が廻つてく  
る。よし気のきいた名文でもとペン  
を走らすと大抵最後は「情緒ゆたか  
なひとときをお過ごし下さいませよう  
」という調子に落着くのである。や  
がて自分の原稿が自分の所で印刷さ  
れた案内状が律気なママの手によつ  
て宛名が書かれて何百分の一かに当  
る私のもとにも届いてくる。あのパ  
ーからも、このパーからも.....

さて情緒ゆたかなひとときとはそ  
もどんなときだろうか、恐らく当人  
の経験、欲求、情感によつて表現は  
まちまちだろうが、まづ「やわらか  
く、たのしく、しつぱりとした雰囲気

気」ということになるだろう。  
京都は情緒豊かなまちである。世  
に京情緒といわれる、そのまちのパ  
ーでは、なおさら情緒いっぱいであ  
らねばならない。その情緒の中心と  
なるものはホステスのミスミセス諸  
君であり、かりそめにも客のふとこ  
ろを露骨に狙つてはいけぬし、露  
骨に過ぎるセクシーな言語、動作も  
必ずしも万人好みとはいえない。音  
楽、調度、色彩、照明、そして室温  
に至るまでの総ての調和が保たれて  
優雅な佳人の待るとき、客は時間と  
経済を忘れたのに気がつかない。げ  
に情緒なる哉。

いささか脱線してしまつたが、さ  
でここで情緒を情操におきかえてみ  
ると問題は俄然多くの分野に及ぶよ  
うである。情操の語から端的に情操  
教育という言葉が出てくる。人の情  
操と教育の問題。人間は生物学的に  
は動物であるが、人がケモノから人  
間になつたのは、とりもなおさず他  
人の感情がわかるようになったから  
である。思いやりのある人間、人の  
心のかなしみがわかる人間、子を持  
ち、部下を持つてしみじみ情操教育  
の必要を痛感させられる。明治維新  
以来、否産業革命以来といわれる今  
日の流動期にあつても矢張りその中  
心は人である。世を挙げて楽しみを  
謳歌するレジャー時代もあとに何か  
空虚な淋しさが襲つてくる経験を私  
共は否定出来ない。車が溢れて人を  
ひき殺す非情も所詮同じ人が人を殺  
しているのである。弱肉強食、喰う

療養に入つて、先づ私は結核という  
敵の正体を研究した。この点結核專  
門の病院は全く条件がよく、起居を  
共にする大勢の病友、豊富な文献、  
そして優秀な医師と知識の吸収には  
事欠かない。ここにおいて、まづ入  
院前結核に対する知識の如何に浅く  
い加減な程度のものであつたかを  
思い知つたのが最初の収穫であつ  
た。

この病氣の内容は人により千差万  
別であるから、療法も必ずしも一様  
でないが、戦後新薬の出現に伴つて  
外科手術による療法が可能となり、  
医療の進歩によつて手術の危険度も  
極めて低く(それでも当時は二%程  
度の危険率があつたと思う)再発率  
については肺切除手術の歴史が浅い  
ため結論は出せない時期であつたが  
私の病状は外科手術の適症であつ  
たので、悪い箇所を、そつくり取つ  
てしまふのだから、これ程確かな治  
療法はなからうと割り切つて翌年五  
月に右葉切除の大手術をした。手  
術台に乗せられた時はまないたの鯉  
のような悲壮感もあつたが、術後十  
時間位経過して麻酔がさめて我に戻  
つた時、過去の自分が葬り去られて  
新しい別な自分が出現したような妙  
な気持がしたことを、いまでも覚え  
ている。

とも角もその後は順風満帆とでも  
いおうか、二ヶ月に一度の院長回診  
毎に安静度は進級し、その翌年(昭  
和三十三年)二月に治癒退院、四月  
に二年半ぶりで再び元の職場に復帰  
した。その翌々年社命により東京へ

か喰われるかの世のなかであるだけに、真に情緒を解し、他人の感情を理解する。やさしい思いやりのある人が続々と育ってきて欲しいと切望してやまない。最近機会あって岡澤氏の春宵十話、春風夏雨を読み非常に示唆される所多かつたまに、ここに駄文を弄した次第である。

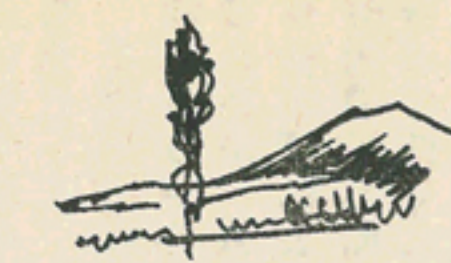
御指名を受けた岡田君お噂は聞いておりました近くに居ながら御面接の機を得ず残念です。偶々まんびつ起稿中京都を訪ねられ二十年振りに再会を得ました佐々木成彰君へ次のパトンをお渡ししました。

(昭一二 株式会社三優社社長)

### ビールの歴史

近藤 徳 弥

(東京支部)



まん筆のバトンを受けたが、近藤は元来筆不精の男で、何を書いて良いかわからぬがビール屋だから、ビールのことを書いて責をばたします。

△ビールは農業と共に古いVといはれるように、ビールの起原は紀元前四千年の昔、メソポタミア時代にまでさかのぼります。当時チグリス・ユーフラティス両河の流域でパピロニヤ人が立派な文化生活を営んでいたことは歴史の教えるところですが、このパピロニヤ人がすでにビ

### まんびつ五人集

ールを知っていたのです。とところで、パピロニヤでは、ビールは通貨とも価値の基準とも認められており、官吏や労働者には給料外の手当としてビールが与えられ、病人は薬用としてビールを飲み、いろいろの神には毎日欠かさずビールが献げられていました。紀元前二二二五年にハムラビ王が發布した布告には大変興味深いことが書かれています。当時市内には、いたるところに酒場があつたわけですが、この酒場のビールは飲代はすべて貨幣の代りに穀物で支払われ、穀物の相場は国家が、その都度公けに定めていました。現金払でないお客は秋の収穫をまつて勘定を済ませました。

エジプト人も、われわれが番茶を飲むように誰もが自由にビールを飲んでたようです。たとえば小学校へ通う少年達は毎朝二本のビールをお茶がわりに持参したことが述べられており、また一人の父親は大学へ通う息子にたいして、ビールを飲むこともよいが、恋愛と同じように節度を守るのがよいと戒めた手紙が残っているのを見るとエジプトの学生達もずいぶんビールを飲んだと思えます。

このようにビールは、パピロン、エジプト等人類発生の地で作られ、ギリシヤ、ローマの時代を経て、歐洲全土へ広まり、メイフラワー号と共に新大陸へ渡つたのです。

さて、日本でビールを始めて作つたのはだれか、それは幕末の蘭医川本幸民であるといわれています。

嘉永六年に幕府の通訳に任ぜられアメリカのペリー提督と浦賀でしばしば会話したこともあるので、この時にビールの味を知つたと思はれます。蘭書による知識と、この際の味覚から庭前に畑を築き、自分でビールを試醸したと想像されます。

明治初頃から文明開化の需要にこたえて、日本各地でビールが生産され、その数は記録に残るものだけで百数十に及んでいます。しかし日本のビール産業が近代産業としての歩みを始めたのは明治二十年頃からであります。日露戦争による好況が反動期に入るに及んで群小企業の整理統合が進み、アサヒビール、エビスビール、サッポロビール、キリンビール、カブトビール(のちのユニオンビール)、クラビールの六銘柄にしぼられてしまいました。

その後の日本のビール産業に、第一次世界大戦後の好況、昭和初期の不況、満洲事変後つ発後の準戦時体制から戦争への突入、敗戦後の苦境大日本麦酒のアサヒビール、ニッポンビールへの集排法による分離等、日本の歴史と共に歩んでまいりましたが、この間にビール産業は主要原料の大麦、ホップの国産化を達成いたしました。

明治以来百年にも満たない日本のビールが今日その品質の優秀性については、世界的評価を受けているがその生産量を見ると、昭和三十九年度は業界待望の千万石を突破することとは確実です。これは戦前最高の昭和十四年の一七〇万石の約七倍、終

戦の年、昭和二十年の四六万石に比較すると約二十二倍であります。都市労働者世帯の所得が戦前の水準に達したのは昭和二十九年でありますが、その前年にビールは戦前最高の記録を破り、その後伸び悩んだ年もありましたが、殆んど毎年二〇％前後の成長を見ているわけです。昭和三十三年には日本古来の清酒の生産量を抜き、日本の酒類の王座についております。

昭和三十年には、日本は世界第十四位のビール生産国でありましたが他の国々の伸び悩み状況を尻目に、昭和三十八年には遂にアメリカ、西独、イギリス、ソビエト、フランスに次いで世界第六位に進出したしました。しかし、これを各国民一人当りの生産量で比較しますと、日本ではビール大びん換算で一年間に二八本であり、一位ベルギーの二五〇本、東西ドイツ及びチェコの一八〇本、東一〇本、アメリカの一〇〇本に比べて全く微々たるものであります。

日本のビール生産量は、どこまで伸びるか？国民一人当りの消費量でアメリカの半分までは到達すると仮定すれば、現在の二倍までは可能なのであります。しかし、ここで見逃してはならないことは、日本のビールは諸外国に比べて非常に税負担が重いということでもあります。一kl当りの税額で比較いたしますと、日本の九五、〇〇〇円(平均)、アメリカの三七、二四〇円(平均)、イギリス四三、九八九円、西独一〇、八

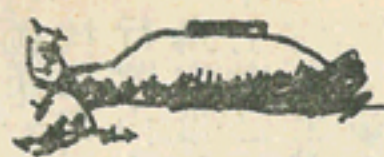
〇〇円一三、五〇〇円、イタリー二、三二〇円、フランス無税と、世界最高のビール税を負担していることとです。従つて各国の租税収入に占める酒税の割合も他の国々の二一五％に比較して一〇％と最高であります。ビール小売価格の内五二％を占めるビール税が軽減されるならば、健康にして文化的なビールはますます愛好され、日本は質量共に世界に冠たるビール王国になるでしょう。次回名古屋の増田常次郎さんへお願いいたします。

(大一五 朝日麦酒常務取締役)

### 北斗寮

小貫 武

(東京支部)



今年の春だつたと思ふ私達より若い曾つての北斗寮生が集り、旅費をカシパして、旧恩の暗方の人を東京に招き、心から持てなしたという、お話を聞いた。誰の発案で実行は誰がしたかは寡聞にして耳にしなかつたが、まことに心温まる極みである。好むと好まざるとに拘らず権力の前に屈服を余儀なくせられ、おのれの背伸びを処世術と心得、粉飾も己むを得ず、名利に巧い、いまの世の生き方を、まざまざ見せ付けられておる其処処に、この行いは正に一服の清涼剤であつて、まさに心に爽かさを覚える。これもよ

き緑丘精神の伝統の心の在り方と見た。

そんな良い話に刺激されて、思い出したように八月末日北斗会なるものを催して見た。おのづから範囲があるもので、一応大正十三年をトツプに昭和四年迄、ゲスト大いに歓迎ということにして試みた。丸々四十年間お会いする機会に恵まれなかつた。当時の舎監高橋益実先生に、誤植だらけの緑丘会名簿をたよりに御案内をして見た。ところが、感謝、感激とは正にこのことであろう。先生が万障を繰合せて、信州松本在より、御出席下さつたのである。二十三名の簡単な自己紹介にも、参み出る何にかを銘々に感じられた。

先生は洋服姿だつたので、もう口喧ない一杯入つた一人から「今日は先生和服ではなかつたですね」と来た。まさに四十年を彷彿して笑いに始つた。フランス語担任教授高橋先生は、終始和服で通うされた方だつた。一度在学中フランス軍艦が小樽港に投錨したとき洋服を着こなされた記憶がいまにして、思い浮んで来る。まつ黒だつた頭髪が真白く變つただけでお健康も重畳、懐しき、嬉しさが胸一杯というのが、お互の心情だつた。一時から始つて終つたのが四時半、一体何んの話をし、齧らしたのが何んであつたかとふりかへつて見ても何も無い。これが同じ釜の飯を食い合つたつわものどもの夢のあとというところかもしれない。

一つの課題として、いまは学生会館と生れ變つた、その一隅に「こ

### まんびつ五人集

にわが北斗寮ありき」(仮称)とでも石碑に銘うとうではないかと提案した先輩があつた。意義あることなので是非実現したいものである。そのときは夫々の学級の前後をゆき振つて奉加帳をまわしてお願いする。高橋先生の正しい住所は

長野県南安曇郡穂高町北穂高寮生活中名物のストームをさておき残飯整理には思出が尽きない。各幹事ともなれば糞はれる時刻と量を予測して、改めて残飯用として新に炊き、モサ達に不平憤満をなからしめたそうだ。良い時代でもあつたが、心したニクイ措置ではなからうか。齢六十になつても自宅でライスカレーと豚汁の場合は、故意に、翌日に繰延べて食う習慣は北斗寮で得た味学の復習であつてなつかしい。いまでもうまいものだ。女房はいつも怪訝なまなざしで見つめておるが、ともあれまことに懐しい一言に尽きる。「小樽の団結友愛の絆はどこから生れるか」とはよく聞かれることだが、曾つての戦友、悪い意味での、受刑者同志。地獄坂上つての北斗寮生活、善悪を別に何か連鎖の一点を感じられないだろうか。お次は手嶋恒二郎さんをお願いする。(昭二)

いままでの

### まんびつ執筆者

(客員) 松尾教授  
(大三) 高橋徹男、下吹栄吉  
(次頁へ)

積水化学工業 新日本窒素肥料 旭化成工業

プラスチックの総合商社

## 田中弥商事株式会社

取締役社長 田中弥三郎 (大12) 専務取締役 山家利典 (昭13)

(本社) 大阪市東区北浜2丁目74番地 TEL(06) 655641~9  
(東京出張所) 東京都千代田区神田淡路町2丁目19番地 TEL(03) 2271・5259

異動

栄転

芝梅太郎(昭九) 住友商事大阪建材部長兼大阪物資部長(大阪建設建材部長)

小池輝男(昭一一) 浅沼商会 東京都千代田区平河二ノ一

村岡英一(昭八) 扶桑相互銀行取締役業務部長(同行岡山支店)

鳥取市東品治町一二二番地一井上克己(昭一一) 住宅金融公庫総務部次長

東京都文京区後楽一丁目四番十号篠田正義(昭一九) 東洋木材企業株式会社名古屋紙器工場(同社大阪工場)

牧野栄二(昭一二) 昭和ネオプラン株式会社取締役販売部長(昭和電工)

白瀬治三郎(大七) 日本綿花協会引退

(自宅) 箕面市半町三三ノ一九

住所変更

豊中市岡町南七丁目一八 井上克己(昭一一) 東京都渋谷区本町一丁目四九 住宅金融公庫宿舍八号

山崎真治(昭三一) 東京都町田市南大谷一、六二七の六

野田政秋(昭一七) 東京都杉並区永福町四四八番地 太田正勝(昭一四) 新居浜市金子山田乙一九七五 (電新居浜四〇三四)

鈴木啓介(一一三) 鈴木啓介事務所 豊橋市小島路一丁目四十二番地の二 豊橋駅前ビル三鈴四階五階 清水淳(昭一七) 共栄火災海上相互会社大阪支店 大阪市東区高麗橋五丁目四五番地 興銀ビル別館三階

左記の方の住所御存じの方はお知らせ下さい(三十九年度申込者ですが「緑丘」転居先不明で戻って来ません)

(旧住所) 小樽市入舟町九ノ一七 宮沢秋雄(昭九) 札幌市北二条西二十一丁目 石本芳雄(昭七) 札幌市北十三条東十五丁目細川方 島田五雄(昭)

(死亡) 佐藤良司(昭八) 39・10・8逝去 原謙介(大七) 39・3・26逝去 奥野定一(大一一) 39・5・23逝去

事務所移転

(大四) 八木康之助 (大六) 伊東小四郎 (大八) 戸井正三、大野純一、三好長次、増井得三、谷本朋次、郡菊之助、西村百太郎、松本義一、大山謙吉、広岡一男、福田誠、藤居元三

(大九) 菅谷重平、奥村義信、小島憲市、奥田直 (大一一) 宮地邦介、小橋庸三、杉山昌作、神沢重治、梶川亨司、功刀素重

(大一二) 田中弥三郎、塩谷精一郎 大久保鹿次、大井義郎、渡辺一夫 小河成美、池田繁正、田中実、穴釜升夫、玉井武、日南田美文、佐藤信雄、若林周五郎

(大一一三) 古関周蔵 (大一一四) ほろにが太郎、片岡亮一 小武海鉄郎、松原治郎、森下弘、北村良吉、桐田鉄郎

(大一一五) 増田常次郎、中野清一、白木小一郎、近藤徳弥、津久井七雄、大平善梧、西野嘉一郎、竹内隆

(昭二) 黒羽秀夫、牧野吉男、岡田政治郎、堂城不二人、友沢和一郎 (昭三) 佐竹繁寿、樋山三郎 (昭四) 小山健児、湊静男、高橋一男、玉井英夫、宇山慶三 (昭五) 池田啓助、井藤久也、吉田友記、北村太治郎、横井七之助 (昭七) 八家要 (昭八) 土岐秀雄、本間広松、小池三郎、高見美雄、会津幸雄 (昭一〇) 篠崎万治郎、若月雅司、北村匡弘 (昭一一) 浅野潔、土屋龍郎、木下春雄、三崎嘉郎、島崎保信、中尾弘、中道良徳、川原俊一、松井要吉、進藤彰、越崎清二、中木平三郎、丸山一郎、紫竹亞津視、秋葉隆一郎、藁目英三、本間誠一、鎌田正三、木村頼雄、小林啓作、角谷榮作、上野茂

(昭一二) 内藤好生、皆川莊一、西谷作太郎、矢野正郎、宮内美雄、木内武之助、牧田恒雄、本間英作 森川正明、石川孝一、浅田厚、岡田保司、山村太兵衛

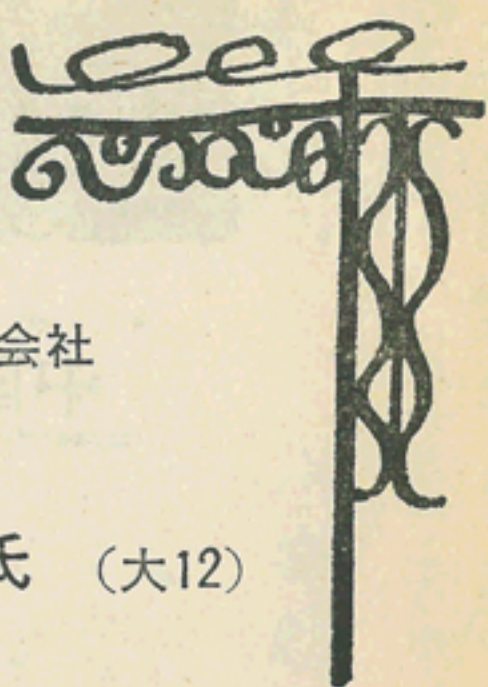
(昭一三) 江川裕一郎、若山永太郎 木村章三、山本俊雄、松ケ野寿夫 丸山弥、平木勇三、金垣英雄、山本俊雄

(昭一四) 伊原利勝、大沼誠治、北村幸、谷英純、沼田博、太田正勝 岩崎雄雄、河西辰男、沢村薫、石黒政夫、北条恒一、三浦正、飛塚誠一、竹島篤二郎、金井勇、八木安、野村鉄太郎、福地貞雄、櫻村久好、尾崎哲平、沢井道成

(昭一六) 相原正美 (昭一六後) 中村平之助、小林芳美 松村克己 (昭一七) 榎谷真一、長尾昌弘、桑野泰次郎、阿部敬作、越智直行、山田光男 (昭二三) 牧口富伍、リトル・ラン ドナア、服部奎吾 (昭一五) 北野巧 (昭二九) 古内一成 (昭三〇) 石津洋三 (昭三一) 小田島和夫 (昭三五) 佐藤良雄、本前勝支朗、長津行高、猪浦淳一 (昭三六) 神田隆志

緑丘人物譚

(8)



中滝製薬工業株式会社

取締役社長

小川又司氏 (大12)



氏は人も知る中滝製薬再出発時の社長として粒々辛苦、今日の盛運をもたらした方であり、その人生はわれわれには生きた教訓であります。高野 失礼ですが、これからのいふ不躰な御質問を致しますが、あしからず御了承を願いますと存じます。早速ですが先輩の御生れはどちらですか。

小川 私は福井なんです。明治三十六年なんです、あの当時は北陸の次男、三男は、北海道へ移住するという気運の時なんです。それで、

私の父親は三男坊だったので私が三つの時に、函館に移住したんです。高野 お家のお仕事は？

小川 海産物問屋なんです。高野 それで、函館で成人なされたわけですね。

小川 そうです。函館商業学校を出ましてね。それから小樽高商へ入り大正十四年に卒業し、それと同時に三井物産に入社したんです。あのころ、今の大阪商船三井船舶の社長の進藤さんと二人が小樽高商から入ったんです。

高野 ああそうでしたか。

小川 それで進藤さんは経理の方に入ったんですが、私は受け渡しの方だったんです。それで四月に入社して、その年の暮には、二人とも一年志願兵として入営したんです。そして戸籍の関係で私は旭川、進藤君は姫路の連隊にそれぞれ配属されたんです。そして一年したら、彼は物産の船舶部が神戸にあり、そこに先輩の佐々木部長がおられたので、そこに入ったんです。私は物産の小樽支店なんです。私はずっと田舎廻りばかりしましたよ。小樽から札幌、秋田を廻って、昭和十三年には支那へ行きまして、青島、濟南と行ったんです。濟南で物産の北支事変というのがありましてね。

高野 終戦後は？

小川 昭和二十三年でしたか、マツカーサー宣言の、財閥解体で三井物産も解体されたんです。その時私は釧路支店に居たんですが、仕方ないので、その店のもの十人位で海産物貿易株式会社という十九万五千円の会社を作って、海産物をやったん

です。それを二年位して極東物産の札幌支店長、そこに一年いて今度は大阪支店長、極東物産、第一通商の合併から続いて第一通商と第一物産が合併。ちょうど門司におった時です。至急上京せよというのできて見たら、ここを引き受けてやれというのです。その年の六月に中滝へきたんです。中滝商店といひ一億の資本だったんですが、その子会社に中滝製薬が四千万円の資本であったんです。ところが商店が破産してまして、結局製薬の方が商店の地盤を引き継いで、再出発したんです。

高野 商事会社からくすりの世界に入ってこられて、第一印象は如何でしたか。

小川 非常に金額が小さくてね。それから返品があるということに驚きました。

高野 再出発の当時は、何かと大変だったでしょう。

小川 当時、三百数十名の解雇者がいましたんですが、これへの退職金の支払いや、残った者への給料の遅配も三カ月ありましたしその当時は銀行もなかなか金を貸してくれないんです。物産もその資格ができたから、金を貸すというのです。あの当時は都内の駒込と、浦和、仙台、盛岡に工場があったんですが、一番金になる駒込の工場を売ったんです。四千万ぐらいで売り、半分は興銀に借金の一部として入れ、二千万円を使わせてもらいました。

高野 社長に就任されてワカ末ビルは建設されるし、東洋製薬も合併されますし、それにオーゼットはヒットを放つし、その御手腕には敬服し

ます。今後の製薬界をどんな風に見ますか。

小川 そうですね、人間の願望のうちで、長生きをしたい、健康でありたいというのは欠くことができないことでしょう。従って医薬品は伸びる一方だと思っております。

高野 それでは最後に御健康の秘けつは？

小川 何もやりませんが、日曜日だけは下手なゴルフをやっている故に非常に元気で。腕の方はサッパリ上りませんが。

高野 特にオーゼットができて。小川 オーゼットも、これで三カ月位の間でいるんですけど体がひきしまつて、軽いですよ。それまで夜中に、トイレに二度ぐらい行っていたものが、もう行かなくなりましたよ。

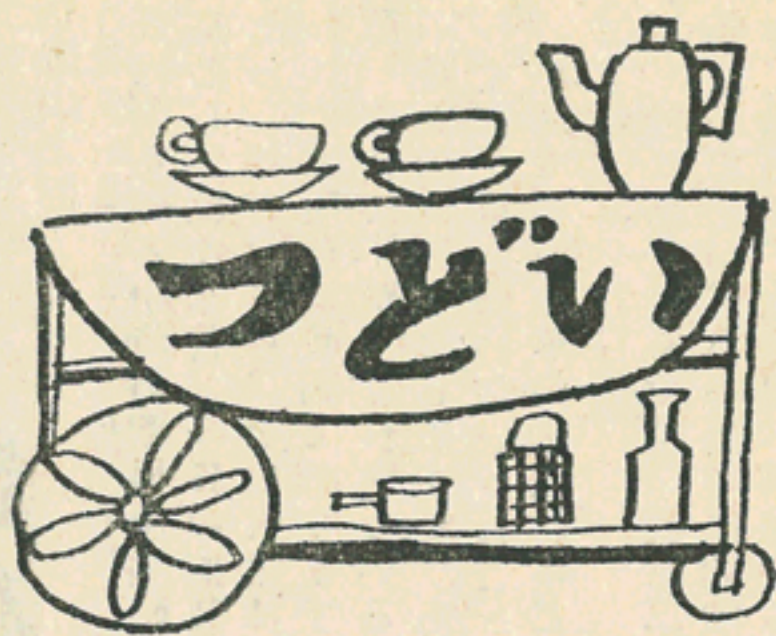
高野 その体格では、かなり御酒もいける方でしょう。

小川 やりましたねえ。物産にいる時には、一升ぐらい平気で飲んだ。高野 なるほど。どうも御忙しいところを有難うございました。

(訪問者) 高野憲一郎(昭二三)

丸嘉機械株式会社取締役東京支店長





# 岡山 広島

## 中国四国集会へ

中野清一(大15)  
(広島支部長)

広島支部は去年の十月によく総会らしい総会をもった。普段の会

合が必要だと役員一同考えたもの、東京、大阪の大手筋?のように、飲食に直結したスポンサーを、幸か不幸か会員に持たない当地のこと、月一回の定例会集は無理と判断、念のためアンケートを集め、一月置きに会合ときめた。

年末年始の、慎重な(?)準備期の後、三月から定例会集に踏み切った。三月は第一金曜に昼食会という形をとった。前年の総会に出席できなかった同窓たちが顔を出してくれ、大村武夫君(昭二)大島重男君(昭九)前山龍男君(昭九)広島に栄転してきた真館一郎君(昭一五)藍沢拓司君(昭三六)たちである。若手の藍沢君から、会合は飲食の他に、先輩たちから一席有益な話をききたいもの、という提案が出る。先輩の林雅己さん(大一一)から、それもいいが今少しお互いの交誼を深めてからでも遅くない。これも適切な意見。

四月始めに、札幌から急に転任してきましたという昭三五卒の松田寛君が支部長宅を訪ねてくれる。支部運営上の好意見を聞いた。支部集會では、とかく大先輩の人たちの間だけで話が弾んで終い、若い同窓は「つんぼさじき」に置かれ勝ち、だから総会は別として定例会集では若い人を置き去りにせぬように、とい

う意見で傾聴に値する。

五月集會は、第一土曜夜の一刻をサッピロビールビヤガーデンで過ぎた。好運にもむし暑い日になり、屋上集會の開放性が当たったのか、県内の東部地区から新顔が沢山に見えた。原田大先輩も久し振りに顔を出して下さる。三原から、高田正明・早川清両君(昭九、十)内海唯利君(昭十六)も松永から参加、市内でも土岐秀雄君(昭八)稲川潔茂君(昭九)が初顔を見せてくれる。紀野副支部長から、秋の岡山支部との合併集會の件を提案してもらおう。屋上ビヤガーデンの故で、スピーカーが喧しくて発言が騒音にかき消され、なかなか上らない。

七月集會は、大阪の田中弥三郎先輩の来広を好機に、第二土曜夜の屋内集會と趣向を変えた。若手の藍沢拓司君が急に東京栄転の指令を受けたとかで、同君の送別の含みにもなった。五月にくらべ小人数の集會になったが、若手四人の同窓が、それぞれ、先輩、大先輩の傍に席を移して話を弾ませているのが好ましかった。

さて、話題を岡山集會に移そう。岡山では、二月から毎月第一土曜に昼食会を実施してきている。支部前進のための役員体制も確立した。月々の話題は、今秋の瀬戸内大会の受

入れ態勢整備の問題で一貫してきたようである。十一月八日の日曜開催という線が固まり、同月五、六両日岡山での国際法学会に出席する大平善悟君(大十五)をゲストに招こうという意向がもり上ってきた。

八月八日、私が上京の途次、岡山の定例会集に立寄る。席上、思いがけぬ風景に直面して終った。岡山支部の有力な推進者、再興者だった村岡英一君(昭八)が入場早々、私に新名刺を静かに差し出す。扶桑相互銀行取締役業務部長という新肩書は、新住所に目を移さずとも、鳥取市本店への栄転を告げている。「緑丘」と「緑丘会報」双方の部厚な綴りを皆に示した上で、これを猪木金人君(昭八)の手許に置いていく、同君の所に行けば、緑丘のことならなんでもわかるようにしておく、と挨拶して猪木君に手渡す。鳥取の若松先生、山田善之助君の名をあげ、鳥取でも鳥取支部づくりをして下さい。と私は言ったものの、岡山での同君の存在を思い、万感が胸を打つ。その故もあつたか、今秋の合併集會、蓋目編集長の慣用語「西日本大会」か「瀬戸内大会」か、呼称が話題の焦点になる。

その後集會を重ねること数回、結局「中国、四国集會」と決定し、十一月七日音戸(呉市)で開催に決った。

### 越崎宗一氏

#### 小樽緑丘会々長に就任決定

前会長讃岐梅二氏病氣療養中のため御本人の御意志を尊重し本年八月八日開催の総会において詮衡委員会にその後任選任を依頼したがあまりにも事が急であつたため後日改めて詮衡委員会を開催して慎重に審議し詮衡委員会の決定をもつて総会の承認を得たこととすることになっておつた。

## 小樽

任を果す事が出来た。越崎氏は郷土史家として著名、また市教育委員長の要職にあつたこともあり、株式会社越崎商店社長として実業界の第一線に立っておられるが、人格識見ともに第一人者であることは、衆目の認めるところであり今後の小樽緑丘会は氏を中心として益々その親睦が深まるものと期待されている。(小林啓作記)



漸く九月五日委員諸氏の都合がつき、小林副会長新谷幹事長、宮下副幹事長陪席の上北海ホテルにおいて詮衡委員会を再会先輩後輩の意見を披瀝し合つた結果満場一致誰一人の異論もなく、大正十一年卒越崎宗一氏を会長に推せんすることに決定した。小林副会長新谷幹事長は直ちにその旨を讃岐前会長に報告するとともに九月八日越崎氏に面接して会長就任方を懇請その御承諾を得、漸く大

合が必要だと役員一同考えたもの、東京、大阪の大手筋?のように、飲食に直結したスポンサーを、幸か不幸か会員に持たない当地のこと、月一回の定例会集は無理と判断、念のためアンケートを集め、一月置きに会合ときめた。

## 札幌

#### 札幌ゴルフトーナメント

ゴルフを通じて緑丘札幌、小樽の親睦は、その後回を重ねる毎に昂り、前月に引続き盛況の裡に今回も左記の通り挙行された。

九月十八日(金)正午スタート  
札幌国際島松コース  
十八ホールスマダラプレー  
参加者十四名 天候晴 (山本記)

## 大阪

#### 九月度十日会

「丘と海と白い雲」に耳をかたむけて

	ネット	ハンデ	グロス
1 小久米	69	28	97
2 藤井	71	29	100
3 山本	72	23	95
4 植田	74	21	95
5 小林	74	36	110
6 奥野	76	22	98
B. B 高岡	84	36	120

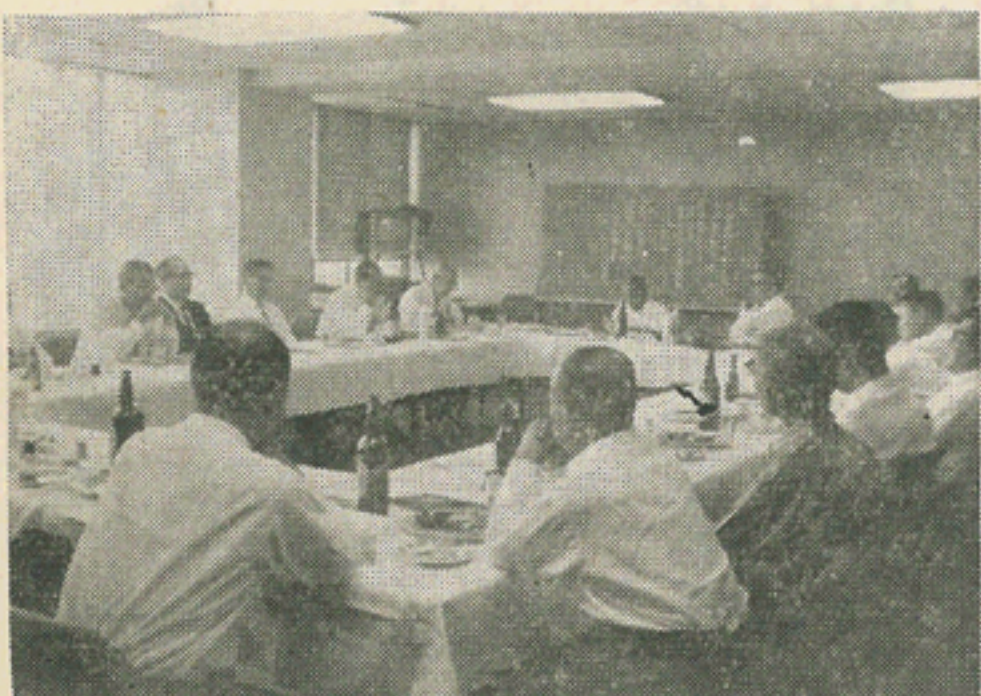
今回の十日会の特別企画は、昭和三十五年北海道放送から放送された。「丘と海と白い雲」の録音であつた。

これは小樽高商生の学徒出陣と、その散華前後の模様を母校松尾教授の解説によって集録したものである。ともすれば感傷的激情に走りそうな企画に理性のブレーキをかけながら、事実のみの追求をめざした録音は、より強く参会者の胸をしめつけずにはいなかった。

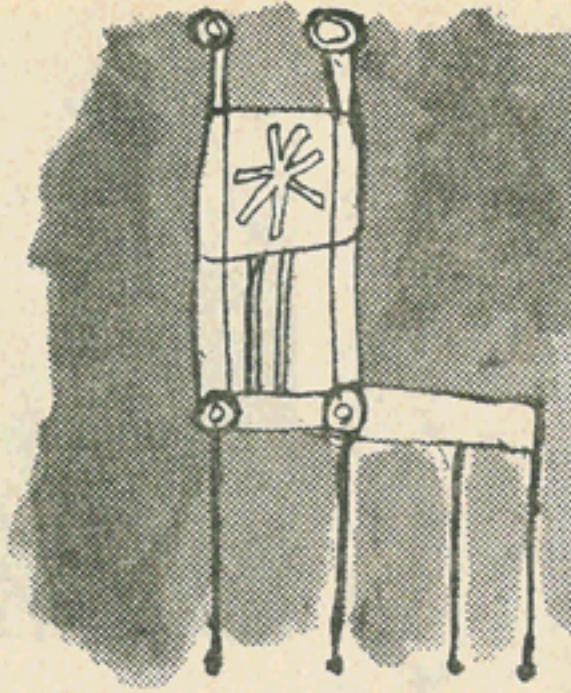
去る五月十五日支部総会に出席された加茂学長の提言にあつたように戦歿学生慰霊のための企画構想が改めて私達の胸によみがえってきた。あの気狂じみた社会情勢のなかで、

終戦以来、私達は軍国主義の罪悪を教えこまれ、戦争との関連において想起される一切に対して白眼視する傾向が一般化された。

このことは基本的には勿論正しかつたかも知れない。しかし、私達は当時の社会情勢のなかで、ただ祖国の未来の栄光を祈り、信じて死地におもむいた多くの若き純粋な魂までも忘却し去ることは決して出来ないことであらう。



# 東京 緑丘十日会



## 第一三〇回 九月例会

九月十日午後五時  
半東京ステーション  
ホテル二階宴会場に苦  
米地先生、岡田象議  
院議員の両氏を迎え  
て掲題例会を催したが、大正十四年  
卒業の当番幹事の企画が時機よろし  
きを得たためか三十三名の多数が参  
会した。

察を終えられ八月三日帰国された岡田代議士のイデオロギーを離れ、社会党代議士としての立場からでなく高い視野からの視察談は非常に興味深いものがあつた。

特に同氏が周恩来首相に会われた時「米國はベトナムに決して勝てないだろう。然しまた手を引くこともできないだろう」ということを再三繰返して言われたが、実際に南ベトナムを觀て政府側は僅かに点と線を保つのみで、それも途中きれぎれの線によつてつながれる程度の治安状態であり、しかも点(都市)においても可成りの数のベトナムによつて毎日の如く治安は乱され、また前線においてもベトナムは神出鬼没、特に人命を目的とするより武器奪略に重点を置いており、ベトナムは大部分アメリカ製の武器を使用している状況で同氏は周恩来首相の言葉を現地においてしみじみと感じられた由である。

またラオスの現状も南ベトナムに似たようなものであるが、特に感じたことはラオス國民の顔が日本人に非常に似ていると同時にきわめて親日感をもっており、現在可成りの日本製品を輸入しているという点から觀ても今後日本としても、充分考慮に入れるべきではないか、と一時間数十分に及ぶ興味深いお話を結ばれた。

### 集會予告

昭和十九年辛酉二〇周年記念  
十一月十四日(土)  
於東京・プリンスホテル  
中国、四國集會  
(広島、岡山、鳥取、島根、山口四國参加) 十一月七日、八日  
於音戸(広島県)  
小樽商大・北大懇親會(大阪)  
十一月十日夜  
於サッポロビール會議室  
福島県支部總會  
十一月二十二日(午後三時)  
於東山温泉グランドホテル  
昭八会東京集會  
十一月二十六日  
(鈴木三七君を迎える)

### 前小樽緑丘会會長

讃岐梅二氏(大一一) 逝去  
十月三十日午後零時十一分肺臟ガンのため札幌斗南病院で死去。六十二才。  
告別式は二日午前十時半から小樽市量徳寺で行なわれた。  
大正十二年小樽で開かれた第一回全日本スキー選手権大会で純ジャンプに優賞、日本ジャンプ界の草分けとして有名。  
昨年小樽に新しく小樽緑丘会を結成して、初代会長となられた。

- た。(文責神田)  
和氣あいあいの裡に八時十分散會出席者
- 来賓 苦米地英俊、岡田 春夫  
大 三 宮崎 省三  
大 四 佐々木周一、上村甚四郎  
大 九 板倉 誠  
大一一〇 大谷 敏治、鈴木 敬吉  
大一二 小沼 武文、石川 一  
大一三 古関 周蔵、谷 弥太郎  
大一四 高橋 格、高橋 武雄  
椎野良之助、進藤 孝二  
菅沼 雄豪、常山 寅二  
安西 東吉  
大一一五 津久井七雄、神田 正英  
昭 二 杉中 弘吾  
昭 三 齋藤 静夫、道善 宇内  
昭 四 久保 亮  
昭 五 大場 忠久  
昭 一 上谷 豊馬、末永 俊治  
昭 一 高木 重信  
昭 一 二 矢野 正郎  
昭 一 三 山本 俊雄  
昭 一 六 龜山 英夫  
昭 二 二 岡林 豊樹
- なお十月十日は土曜日のため休會であつた。
- 苦米地英俊先生  
勲二等旭日重光章 受賞さる  
西野嘉一郎氏(大一一)  
藍綬褒章授与さる

実に多くの先輩達が、個々の人間的感情をより高次元の理念に昇華させながら死んでいったのだ。  
その礎石のうえに、平和な暮らしを営む私達のなすべきこと、なしうることは何であろうか……。  
多くのことを考えさせられ、深く自省する機会を与えられた十日会で

### 木曾栄作先生を囲む

#### 大阪支部有志懇談会

去る九月二十二日ライオンズクラブ・アジア大会に出席の木曾栄作教授を京都より招き、緑丘会大阪支部の有志相集り、懇談会を開催した。十七名の参加を得た。

何時に変わらぬ元氣な先生を迎え、大阪支部長石田平八氏から歓迎の挨拶

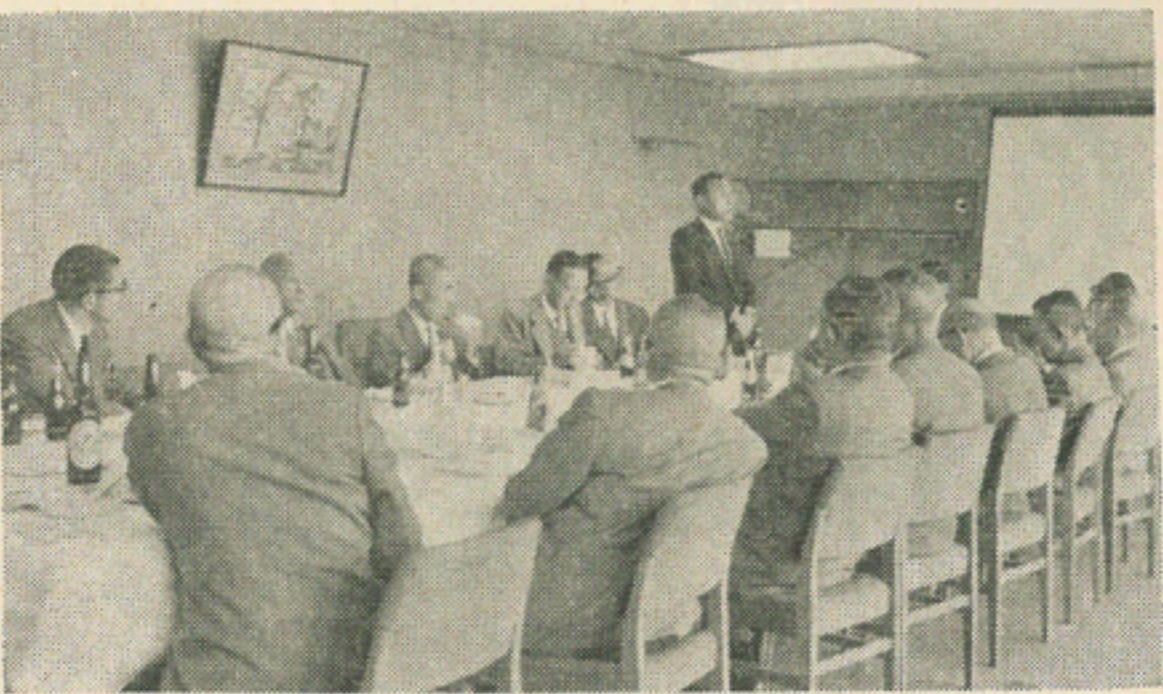
あつた。  
新阪急ビル八階、サツポロビールの會議室である会場からは、澄みきった空のもとに生駒連山が秋色をおびて横たわっているのが望遠された。サツポロビルが心良く喉をうるおしてくるのがうれしい。  
(S記)

撈があり、藤井幸男、実方正雄、桜井純一、和田昌雄、若山永太郎、藤目英三等、交々立つて歓迎の辞、学生時代と先生の若き日の思い出など、和氣霽々の一夕を過ごす、この時こそと人前もはばからず、会場に行進歌、校歌が肩を組んで緑丘人のフィナーレが……。  
午後八時半幕を閉じた。

### 十月度十日会

九日一日繰上げて日紡貝塚バレーボール選手の「挑戦」カラーフィルムを上映した。オリンピックを明日に控え、大きな期待を持って銀幕に喰い入って見る。大松監督以下猛烈なボールの応酬で片づを飲んだ。

このハードトレーニングが二十八年振りの女子団体初の金メダルに連なった。兼松の和田益太郎氏(昭一三年)の御世話で楽しい昼食会をもった。



兼松のP・Rを忘れない和田君

### 緑士会

#### 阪神支部の集い

九月十一日夜紫煙荘に集會。  
この春神戸の太陽鉦工KK(モリブデン鉦)に赴任して来た松岡君の歓迎を兼ねての集まりである。出席者はレコード破りの九名(松岡、杉山、四谷、高浜、竹村、久保、松本、野島の諸君に小生)何時も乍らなごやかなこと。話は小樽時代のことども、学友の消息、長生きのこと、孫のこと等々、集まる程度の同じ語りながら、楽しみ亦その中にありと云うところ、数刻を過ぎるも少しの退屈も覚えぬ。高浜君を始め二、三の者の小唄の低唱も亦初秋の夜にふさわしく、老人ならではの味えぬ境地と云うべきか。(宮地記)

### 東京一寮会(忘年会)

12月12日(土)午後3時  
銀座7丁目 サッポロビヤホール

木曾先生を囲む  
有志懇談会  
S. 39. 9. 22.  
茶ニヒヤ  
石田平八氏  
藤目英三氏  
若山永太郎氏  
和田昌雄氏  
藤井純一氏  
藤田幸三氏  
菅沼雄豪氏  
常山寅二氏  
高橋武雄氏  
高橋格氏  
高橋敏治氏  
高橋敬吉氏  
高橋武文氏  
高橋石川一氏  
高橋谷弥太郎氏  
高橋進藤孝二氏  
高橋菅沼雄豪氏  
高橋常山寅二氏  
高橋安西東吉氏  
高橋津久井七雄氏  
高橋神田正英氏  
高橋杉中弘吾氏  
高橋齋藤静夫氏  
高橋道善宇内氏  
高橋久保亮氏  
高橋大場忠久氏  
高橋上谷豊馬氏  
高橋末永俊治氏  
高橋高木重信氏  
高橋矢野正郎氏  
高橋山本俊雄氏  
高橋龜山英夫氏  
高橋岡林豊樹氏

オリンピックの年に贈る!

# 世界の味

料理缶詰



御歳暮に  
絶賛好評

全国デパート・有名食品店  
明治屋等外商部取扱

## エム・シー・シー食品株式会社

代表取締役 水垣敏正 (昭五卒)

神戸市長田区苅藁通5丁目15 TEL神戸(67)1245(代)

### 「小林多喜二特集」 原稿募集

母校が生んだ小林多喜二(大―三)特集の原稿を募集します。  
伊藤整氏(大―四)からもすでに御寄稿をいただいております。多喜二と同期大正十三年卒は勿論、多数緑丘人の投稿をお待ちします。  
〆切 十二月二十日

来年五月に小林多喜二の碑が建設されますので、それまでに特集を出版し度いと思っております。多喜二も知らず、全集も読んだ事のない編集者が編集するのですが、この特集号が日本文壇に於ける一つの資料となる事を念願としています。それは同期生が多分執筆下さって今までに知れてなかった事実がこの「緑丘」に初めて掲載されるかも知りません。緑丘人ばかりでなく、広く一般からの投稿も期待しています。

### 三代校長 苦米地英俊先生 特集計画

東京支部よりの発案により、来春早々苦米地英俊先生特集計画をすゝめます。  
振って多数の御寄稿を希望します。

一回(二頁全段) 一、二、〇〇〇円  
一回(1/2段) 六、〇〇〇円  
一回(1/4段) 三、〇〇〇円  
年間契約は特に割安にいたします。  
代金支払は誌上掲載後で結構です。

### 編集後記

☆待望の緑丘戦及学生特集号をお届けします。この「緑丘」がもつと早く世の中に出ておつたら、生々しい手記や日記を入手して発表出来たでしょう。現在が過去につながり未来が現在につづく以上、参戦した人々の記録、若き日起居を共にした学友らを失った記録を綴って、あの惨禍を再び引き起こさぬよう、こい願う気持は誰れしも同じであらうと思ひます。時がたつに従い人々の記憶は薄れて行きますが、今この時点で緑丘人の戦及学生特集を発刊し得た事は意義があつたと思ひます。  
☆殊に「丘と海と白い雲」松尾教授解説のテープは北海道放送局より放送(昭和三十五年)された録音であり、この寄贈をいただいて大阪支部、広島支部、岡山支部、鳥取、島根、四国の方々に聞いて貰う機会を持つた事を松尾教授に感謝いたします。  
テープ入手は「緑丘」が戦及学生特集計画を発表したのが機縁であつた事も喜んで居ります。まだ聞いた事のない方には是非聞いていただき度い名篇であり、加茂学長も永久に残し度い記録だと力強く申されておりました。「緑丘」編集部がこのテープを保管しております。

訂正(三十九年)  
9頁 「漢の緑鐘」は「漢の緑釉鐘」に  
24頁 白木一郎は白木小一郎に  
28頁 緑丘会中国西国大会は中国四国大会に



## 千代田火災海上保険株式会社

火災保険 海上保険 運送保険 傷害保険  
自動車保険 盗難保険 動物保険 信用保険  
保証保険 航空保険 風水害保険 ガラス保険  
自動車損害賠償責任保険 機械保険 船客傷害賠償責任保険  
賠償責任保険 原子力保険 建設工事保険 動産総合保険

取締役会長 古 関 周 蔵 (大正13年)

取締役社長 手 嶋 恒 二 郎 (昭和2年)

本社 東京都中央区京橋1-3 TEL(535)4671